

千円ノミニ過キサルトテ以テ遺憾トスル
ヲ得ス。○甲者ガ乙者ト共合シタル以上ハ甲
者ハ其金高ノ中六百六十六円六十六銭ノ配
当ヲ受ク可ク乙者ハ三百三十三円三十三銭
ノ配当ヲ受ク可シ。○去レトモ甲者ハ更ニ其
差押ヲ受ケタル他人ニ對シテ残額三百三十
三円ノ金高ヲ要求スルノ權アラシ。如何トナ
レハ甲者ノ之ヲ得ルヲ能ハサル姿ニ至リタ
ルハ全ク右ノ差押ヲ受ケタル他人ノ不注意
ニ出タルモノナルカ故ナリ
然レトモ甲者ハ何レノ場合ニ於テモ右ノ如
ク一旦其配当ヲ行フタル後ニ遺存スル總テ
ノ金高ヲ己レニ返還セシムルノ權アル可シ

ト信スルハ誤謬ナリ甲者ハ唯右ノ辨済ニ因
リ自ラ失シタル部分ヲ己レニ送還セシムル
ノ權アルノミニ過キサルナリ。○尤レハ若シ
乙者ノ有スル債主權ノ高ガ五百円ノ金高ニ
止マラズシテ之ヲ千円ノ金額ナリシトセン
ニ(之ニ前ノ千円ヲ合シテ二千円ナリ)此場合
ニ於テハ差押ヲ受ケタル他人ガ及令ヒ未ダ
少シモ辨済ヲ為サ、リシ以前タリト虽モ右
二個ノ權利者ハ到底完全ノ辨済ヲ受クルニ
至ラサル可シ各々其債主權ノ中四分一ヲ失
スルニ至ラン即チ右權利者ハ各千円ヲ受ク
ルニ至ラスシテ唯七百五十円ノ金高ヲ受取
ルノミニ過キサル可シ然ルニ若シ其他人カ

既ニ五百円ノ金高ヲ辨済シタル後ナル時ハ
前キニ六百六十六円ノミヲ受取りタル甲者
ハ更ニ之ニ對シテ八十三円三十三錢ノ金高
ヲ己レニ返還セシム可キナリ此八十三円三
十三錢ハ即チ甲者ノ受取ル可キ七百五十円
ノ中不足スル部分ナリ
以上詳陳シタル諸多ノ原則ハ民法草案按第四
百八十条ニ於テ既ニ之ヲ規定セリ

第六章

保存差押ノ事

(佛商法第百七十二条佛訴訟法第百七十二条)

保存差押ハ即チ執行差押ニ相對スルモノナ
リ

抑モ法律上保存ノ名義(即チ義務者ノ無資力
トナル場合ニ被ムル可キ損害ヲ豫防スル方
法)トシテ其義務者ノ財産ヲ差押ヘルヲ允
許セルハ蓋シ変例ナリ

佛蘭西法典ニハ唯其二個ノ場合アルノミニ
過キサルナリ一ハ即チ此草案按中最初ニ示シ
アル場合(商法第百七十二条参觀)ニシテ他ノ
一ハ即チ急速ノ処分ヲ要スル事件ニ関スル
場合ナリ(訴訟法第四百七十二条参觀)
蓋シ保存差押ナルモノハ元來執行ノ証昏ニ

基因シテ起ルモノニ非ス且ツ随意ノ執行ヲ
行ハシムル為メニ法律上ニ規定セル総テノ
方法ヲ未タ施シ尽サズシテ常ニ之ヲ行フモ
ノナレバ自ラ其義務者ノ所有権ヲ大ニ妨害
スルニ至ルナリ

此草按ノ規定スル所ハ右ノ方法ヲシテ一層
施シ易カラシメンテ圖リタルモノナリ如
何トナレハ經驗上ニ付テ之ヲ觀ルニ日本ニ
於テモ他ノ諸國ニ於ケルカ如ク屢々義務者
タル者ハ敢テ裁判上ノ手續ニ因リ得ル所ノ
時間ヲ以テ他ヨリ金額ヲ得可キ工面ヲ為サ
ンカタメ又ハ其他義務ヲ執行スル方法ヲ施
サンカ為メニ用フルテ為サズ却テ其時間

ヲ幸トシテ既ニ自ラ保存スル財産ヲモ之ヲ
隱匿シ以テ後チ執行差押ヲ為スモ到底之ヲ
無益ナラシメンテ計ルカ故ナリ

且ツ此草按中ニ記載セル保存差押ノ場合ハ
佛蘭西法典ニテ之ヲ允許セル場合ヨリモ其
数稍々多シト虽氏前段ニ示シタル第四百十
七条ノ如ク廣漠タルモノニハ非サルナリ蓋
シ義務者ノ実意アラサルテ表示スルニ至
ル可キ此ノ如キ方法ヲ施スニハ唯急速ヲ要
スル事實アルノミヲ以テ充分足レリト為ス
可カラサルカ故ナリ

第八十七条○義務者ハ動産物ハ尤ノ場合ニ於
テ既ニ過期シタル負債ニ付キ保存ノ方法ニテ

之ヲ差押ヘルヲ得可シ

第一、辨済ヲ為サ、ルニ因リ償ヲ要メントスル
為換手形又ハ引工、タルドル手形ニ付キ主
タル義務者トシテ己レノ姓名ヲ手署シタルカ
若クハ保証人トシテ己レノ姓名ヲ手署シタル
時

第二、其者遠海ニ航行セントスル船ノ船主又ハ
船長ニシテ且ツ其船ヲ修繕センカ為メ若クハ
旅行中ニ要用ナル網具及ヒ其他衣食料等ヲ供
給スル事ニ付約定シタル義務ナル時

第三、其者市商又ハ旅商ニシテ市場若クハ自己
ノ住居スル土地以外ノ地方ニテ一ノ義務ヲ擔
當シタル時

茲ニ先ツ法律ノ示ス所ハ諸多ノ動産物ニ限
リテ保存ノ名義ニテ差押ヲ為スヲ得可シ
ト云フニ在リ

法律ハ其負債ニ付テ只一ノ条件ヲ要シタル
ノミニ過キス即チ負債ノ過期シタルモノニ
限ルト云フ是ナリ尤レバ其目的タルモノガ
必スシモ確定セルヲ要セス、又必スシモ詳
明ナルヲ要セズ、又執行カアル証昏アルヲ
ヲ必要トセサルナリ

以下ノ諸箇条ニ於テハ裁判官ノ許可ヲ以テ
右等ノ要件ニ代ヘ充テラルヲ得可キ旨ヲ規
定スルナリ

本条ニ定メアル保存差押ノ第一ノ場合ハ即

ナ
佛蘭西商法第百七十二條ニ記載セルモノ

為換手形并ニ「ビエ」トシタル手形(或ハ之ヲ差圖手形ト詠ス)ノ義解ヲ説明ス可キ場所ハ此所ニアラザルナリ。○茲ニハ唯此等ノ債主權ハ常ニ商業上ノ証券ト云ヘル名稱ニテ恰カモ公ケノ銀行手形ニ等シク世間一般ニ融通セシムル為ノモノナルヲ認知スルヲ以テ足レリトス且ツ法律ハ讓受人ヨリ讓渡人ニ対スル相互ノ要求ヲ避クル為メニ要用ナル總テノ方法ヲ以テ右等債主權ノ辨済ヲ保護セサル可カラサルナリ
法律ハ又「プロテ」(商法第百七十三條ニ要償

ハ「昏」ト詠セリ)ヲ為シタル後ニ非サレバ保存差押ヲ為スヲ許ルカズトセリ尤レバ其負債「單」ニ辨済ノ期限ヲ經過シテ既ニ要求スルヲ得ルモノト為カ、キルノミナラズ尚ホ義務者ニ対シテ其手形ヲ示シタルモ拒ンテ之カ辨済ヲ為カス且ツ其辨済ヲ拒否シタル事實ハ正當ノ法式ニ循テ之ヲ証明シタル場合ナルヲ知ル可キナリ
法律ハ爰ニ主タル義務者トシテ自己ノ姓名ヲ手署シタル者ト保証人トシテ自己ノ姓名ヲ手署シタル者ト併列セリ。○為換手形ニ関シテハ二箇ノ主タル義務者アルヲ有リ一ニ為換手形ノ差主人ナリ但シ是レハ其為換

手形、金高ヲ拂渡ス可キ者カ之ヲ承諾セヨ
ル場合即チ其手形、辨済ヲ為ス可キ義務ヲ
擔當セヨル場合ニ限ル也、一、為換手形ノ
金高ヲ拂渡ス可キ者ナリ、但し是レ、其者自
ラ辨済ヲ行フ可キ承諾ヲ為シヨル場合ニ限
ル、ビエ、トク、ラトル手形ニ付テ主タル義
務者ヨル中人、即チ之ニ已レ、姓名ヲ手署
シヨル者ナリ

尤、者等、皆其従ル義務者ナリトス、即チ
為換手形又、ビエ、トク、ラトル手形、裏層
人若クハ、讓渡人、保証人、擔保人、是ナリ
若シ右等、商業証券ニ付テ償ヲ要スル場合
ニ至ル時、保証人モ亦主タル義務者ニ等シ

ク必ス自ラ保存差押ヲ受ケサルヲ得ズ如何
トナレバ此時ニ至テハ最早ヤ保証人タリト
モ自ラ其辨済ヲ為ス可キ要求ヲ受ク可キカ
故ナリ

遠海ニ航行セントスル船、為メニ義務ノ約
束ヲ為シタル場合ハ亦特別ノ危険アルカ故
ニ等シク保存差押ヲ行フヲ要スルナリ○
佛蘭西訴訟法ニ因レハ此ノ如キ場合ニ於テ
ハ唯至急ニ呼出状ヲ差出スヲ許ルスト云
フノミニ止マルモノ、如シ(訴訟法第四百十
八條)去リナカラ其前、第四百十七條ニ記載
セル一般ノ法則ニ付テ之ヲ觀ル時ハ此場合
ニ於テモ亦等レク保存差押ヲ行フヲ得ル

ヤ敢テ疑フ可カラサルナリ
本条ニ定メアル第三ノ場合ハ即チ其義務者
ガ概シテ余リ價ノ貴重ナラサル諸多ノ物件
ヲ賣却スル為メニ市々村々ニ行商ヲ為シ又
ハ市場ニ出張スルヲ以テ常ニ已レノ職業ト
スル場合ナリ○勿論此ノ如キ商業ヲ以テ常
職トスル者ト虽モ必スレモ其定マリタル住
所アラズト限リタルモノニ非ズ去レトモ此
等ノ職業アル者ハ始終其居ヲ一ニセサルカ
故ニ常ニ之ニ出会スルニ難シ且ツ通常ノ差
押手續ニ因リテ其処置ヲ施サントスル時ハ
必ス多少ノ困難アルヲ免カレサル可ク從テ
其入費モ亦敢テ僅少ナラサル可シ

是故ニ法律ハ此行商人等ノ自ラ住居スル土地
ノ以外ニ在リテ約束シタル負債ノ辨濟ニ充ツル為
メニ其若ノ現ニ在ル所ノ場所ニ於テ其動産物及
ヒ商品等ヲ保存ノ名義ニテ差押ヘルヲ允許セ
リ○此場合ハ佛蘭西訴訟法第八百二十ニ条
ニ規定セル所ト至ク同様ナラスト虽モ其
箇条ニ據リテ之ヲ記定シタルナリ
第百八十八条○前条ニ定メアル第一ノ場合ニ於
テハ義務者ノ住居スル土地ニ在ル民事裁判所
ノ所長其差押ノ許可ヲ与フベク第ニノ場合ニ
於テハ其船ノ碇泊スル土地ヲ管轄スル民事裁
判所ノ所長其差押ノ許可ヲ与フ可シ
第百三ノ場合ニ於テハ其差押ヲ為カントスル物

件ノ存在スル土地ノ治安裁判官ニ就テ其許可
ヲ要ム可シ

若シ負債ノ高ガ正確ナラズ且ハ分明ナラハル
時ハ右ノ許可ヲ以テ幾許ノ金高ニ至ル迄其財
産ノ差押ヲ為ス可キカヲ指定スルヲ要ス

保存差押ハ元來執行カヲ旨スル証書ヲ以テ
之ヲ行フニ非リルカ故ニ必ズ相當ノ規則ヲ
ラリルニ於テハ或ハ失當ノ處置ヲ施スヤモ
計リ難シ是レ即チ裁判官ノ許可ヲ要スルト規
定アル所以ナリ

前条ニ記載アル三個ノ場合ニ於テハ各々其
裁判官ノ管轄ヲ異ニス其之ヲ異ニスル所以
ハ別ニ辨明セズシテ詳カナリ

且ツ中条ノ末項ニ於テハ其権利者ノ擔保ニ
充テル為メニ要用ナル部分ニ止マルヲ要ス
ルト云ヘル法意ヲ示シテ櫻リニ其差押ノ当
ヲ失セカル様ニ注意ヲ為セリ若シ債主権ノ
高カ詳明ナラリル場合ナルハ裁判官ノ許
可ヲ以テ其差押ヲ行フ可キ金高ヲ定ム可ク
又其假リノ算許ナリトモ之ヲ為シ能ハサル
場合ニ於テハ裁判官ノ許可ヲ以テ其差押ヲ
行フ可キ財産ノ高ヲ定ム可シ
又裁判官ノ義務者ノ櫻リニ之ヲ欺隠スル
ノ思ハラリル財産ヲ残シ置キテ特リ其欺
隠スルニ容易ナル諸件ノニニ限リテ差押ヲ
允許スルヲ得可シ

第百八十九條の左ノ場合ニ於テ、假令ニ約定シタル期限ニ至ラザル時ト雖モ、其ノ保存差押ヲ為スルヲ得可シ

第一、義務者が法律上ニテ法律ノ期限ヲ失ス可シト定メラル場合中ニ在ル時

第二、義務者が已レノ權利者ヲ害ス可キ詐偽ヲ為シテ自ら有スル財産ノ中一部分ヲ他ニ移

轉シタル時

第三、義務者自己ノ住所ヲ立去リタル後現ニ滞留スル所ヲ其權利者ニ秘匿スル時

第四、義務者外国人ニシテ再來ノ意ナク且ツ書入質ノ抵当トナサザル不動産ヲ残シ置ケテ

無クシテ將ニ日本國ヲ去ラントスル時

第百八十七條ニ於テ法律ノ規定スル所ニ既ニ其期限ノ經過シタル負債ノ事ナリ之ニ及シ

テ本條ニ記載スル所ニ其約定シタル期限ノ未ク經過セザル時間中ニ在リテ義務者ハ此

期限ノ利益ヲ失スルニ至ル場合ナリ此場合ニ於テ、既ニ過期シタル負債ナリト同様ニ

之ヲ看做ス可キ故ニ法律ニ其保存差押ヲ行フテ先許スルナリ

本條ニ記載スル第一ノ場合ニ義務者カ法律上ノ期限ヲ失スル諸事ノ場合ニ関スルモノ

ナレバ其民法ニ密着接スル所アリ○此等ノ場合ニ既ニ民法第百二十五條ニ記載

セリ其場合ニ五個アリ即チ第一家資分散シ

三

タルカ又一無資カケルノ判明ナル場合、
二財産ノ中(不動産モ等シク)此中ニ加フ可シ
最モ考キ部分ヲ他ニ移轉セル場合但シ依令
ニ詐内アラスシテ之ヲ移轉スル時トモ氏亦
右同様ナリトス、又三財産ノ中右同様ノ部
ヲ他ノ権利者ヨリ差押ハラレタル場合、
既ニ約定セシ抵当ヲ差出スルヲ拒否スルカ
又前キニ差出し置キタル抵当物ヲ毀損ス
ル場合、
又五償補トシテ併フ可キ利息ノ辨清
ヲ为リ、
ル場合是ナリ
後日此ノ八十九条ヲ頒布スル、時ニ當リ未
タ民法草案ノ四百二十五条ノ規則実施スラ
リルニ於テハ必ス右ニ明示シタル五箇ノ場

合ヲ記列スルノ要スルナリ
中条第ニノ場合、其ノ一ノ場合ト考テ相異
ナル所アリ。此場合、即チ其権利者ノ損害
トナル可キ詐内ヲ以テ財産ノ中多少ノ部分
ヲ他ニ讓渡シタル場合ナリ。一度此ノ如
キ詐内ヲ行フニ於テハ亦之ヲ屢々スル、
シテ是レ其保存差押ヲ要スル所以ナリ
又三ノ場合、即チ恩惠ノ期限ヲ失シタル場
合、
一ナリ(第四百二十七条第一号)此場合
ニ於テハ義務者カ其権利者ノ訴訟ヲ受ケル
ニ至ルヲ脱カレントテ計リタルヤ明カナリ
又又四ノ場合ニモ亦前段ニ同様ナル危険アリ

第九十条(前条)ノ前条ニ定メラル差押ノ許可ヲ請求スルニハ、たノ如ク區別ヲ為ス可シ

第一、第二、——ノ場合ニ於テハ其義務者ノ住居スル土地ニ在ル民事裁判所ノ所長ニ之ヲ請求ス可シ

第四、第五ノ場合ニ於テハ其差押ヲ可キ物件又ハ其中ノ大部ヲ現在スル土地ノ治安裁判官ニ之ヲ請求ス可シ

本条ノ規則ニハ別段難累アラサルナリ常ニ其差押ヲ允許セル裁判官ノ管轄ニ必ス本条ノ明示スルカ如ク時宜ニ因リテ異ナル所ナカラサル可カラズ

第九十一条(第十四条)以下ノ規則ヲ以テ差押

ヲ可カラスト明定サレタル物件ノ保存ノ若シ

ニテモ亦之ヲ差押フルヲ得ス

又將ニ出帆セントスル船ナル時ハ其船ニ付テ

モ又其艤装ノ為メニ必要ナル網具其他ノ諸具

ニ付キテモ決シテ差押ヲ為ス可カラズ

保存差押ノ変シテ確定ノ差押ト为ルヲ得

ルモノナリ故ニ通常差押ヲ可カラズト定メ

ラレタル物件ニ決シテ其保存差押ノ中ニ之

ヲ加フ可カラズト云フハ固ヨリ当然ノ事ナ

リ

法律ハ爰ニ艤装ニ其艤装ノ為メニ必要ナル諸

件ヲ併セ記セリ蓋シ全ク保存ヲ為スニ過キカ

ル方法ヲ以テ其義務者ヲシテ困難ヲ免メシ

ノ財ヲ尽カシムルニ至ルニ取テ其當ヲ得
ルモノニ非ナルカ故ナリ。此例外ノ規則ニ
因テ其航海中ニ必要ナル飲食等モ亦尋シク
差押ヲ可カラサルモノト決定ス可キナリ
第九十二条(第九十七条ニ規定アル三箇ノ場
合ニ於テハ差押人自ラ申立ル權利ノ基本ニ付
且ツ差押ノ效果ニ付キ決定ヲ为リシムル为メ
ニ八日内ニ其差押ヲ受ゲル者ヲ裁判所ニ呼出
ス可シ但シ其差押証昏ノ写ニ呼出昏ト共ニ之
ヲ送達スルヲ要ス
差押人ノ利益トナル可キ裁判言渡アリタル時
ハ通常ノ法式ニ循ヒ要決昏ヲ出し執行差押ヲ
为シ且ツ賣押ヲ行フ可シ

但シ差押ノ調書ニハ保存ノ名義ニテ既ニ差押
下ラレタル物件ヲ記列ス可カラズ唯之ニ合候
アル事ノ事ヲ附記ス可シ
第九十三条(第九十四条ニ規定アル四箇ノ場
合ニ於テハ差押人前キニ約定セシ期限ヲ失セ
シムル为メ且ツ前条ニ規定アル如ク權利ノ基
本ニ付キ決定ヲ为リシムル为メ三日内ニ其差
押ヲ受ケル者ヲ訴出ス可シ
第九十七条ノ規定アル所ニ即テ其負債ノ過
期シタル場合ナルカ故ニ義務者ニ其權利ノ
基本ニ付テ裁判ヲ受タル为メハ必ズ裁判所
ヘノ呼出ヲ受ケカニ可カラズ。而シテ後義務
者若シ其裁判ニテ敗訴シタル時ハ保存差押

変じテ執行差押トナル可シ
 第八十九条ニ記載アル場合ニ於テハ敢テ当
 然其終ニテ期限ヲ失ス可キニ非カルカ故ニ
 必ス裁判所ニ於テ之ヲ言渡スヲ要スルナリ
 此場合ニ於テハ前段ノ場合ニ等シク同一ノ
 裁判言渡旨ヲ用ルルカ又ハ別クハ裁判言渡
 旨ヲ用クニ其權利ノ基中ニ付テ決定ヲ為ル
 可キナリ
 第九十四条ノ何レノ場合ニモ差押ヲ受ケタ
 ル者ニ其差押ニ付キ故障ノ申立ヲ為シ以テ其
 差押ノ無効ナル者ヲ言渡カシルル為メ且ツ其
 損害ノ賠償ヲ求ルル為メ自ラ差押人ヲ裁判
 所ニ呼出スルヲ得可シ

差押ヲ受ケタル者ハ自ラ進テ其差押ヲ廢棄
 ス可キ訴訟ヲ始メ候セテ損害ノ賠償ヲ要求
 スル訴訟ヲ為スルヲ得可シ
 何レノ一方ヨリ其訴訟ヲ始ムルニ拘ハラズ
 必ズ尤ノ結果ノ一ヲ得可キナリ即チ差押ヲ
 受ケタル者權利ノ基中ニ付テ敗訴トナルカ
 又ハ差押人^敗敗訴シテ其差押ヲ止ムル可キ者ハ
 ニ損害ノ賠償ヲ拂フ可キ旨ヲ言渡サルカ
 ト云フ是ナリ

第七章

不動産差押ノ事

(佛許証法第百七十七條)

夫不動産ノ差押、其効果ニ付テ之ヲ觀シ
「動産ノ差押ヨリ尚ホ重要ナル所アリ又其
枝葉ノ細則ニ降リテ之ヲ觀シハ動産ノ差押
ヨリ一層込ニ入りタル所アリ

不動産ノ差押、其実態ニ其差押人先ニ差押
ヲ受ケタル者ニ関接スルノミニ止テ之ヲ不
差押ヲ行フ以前ニ差押ヲ受ケタル者ト約束
ヲ為シタル他人及ヒ既ニ差押ヲ行フタル以
後ニ約束ヲ為シタル代権者ニモ亦自ラ多少
ノ関係ヲ及ホスナリ
不動産ノ差押ヲ行フニ當リテハ必ズ且々注
意ヲ為ス可キ法則アルヲ要スルナリノ第一

差押ヲ受ケタル者俾リニ其貴重ナル性質アル財産
ヲ失却セザル様計ラサル可カラズ蓋シ不動産ハ人ノ
常ニ最モ戀愛スル財産ナリ且ツ一度ビ之ヲ失スレハ
復タ之ヲ得ルニ難シ○第ニ成ル可ク高價ヲ以テ之カ
賣ルヲ為ス可キ様勤ノサル可カラズ○第ニ又糶賣ニ
テ漫リニ無資カナル買主ニ之ヲ賣渡リル様相當ノ
規則アラカル可カラズ

日本ニ嘗テ代訴人ノ制ヲ設ケタルヲ無シ又新クニ之ヲ
設クルトテ好マサルカ故ニ右最終ニ記シタル處分ニ付
ニハ新クニ一種特別ナル方法ヲ設ケサル可カラズ
串九十五條) 特權又ハ借入質ノ抵当ヲ有スル權利者ハ其抵
当タル財産ニテ不充ナル場合ニ非サレバ其權利ノ為ノニ
嘗テ借入質トテラサル不動産ヲ差押ヘルトテ得ズ

又右ノ權利者ハ尚ホ其義務者ノ所有中ニ在ル
財産ニテ不充ナル場合ニ非サレバ既ニ他人
ナル保有者ノ手ニ移リタル財産ヲ賣却ハント
要求スルトテ得ズ

他人ナル保有者ニ對シテ行フ借入質ニ関スル訴訟規
則ハ終ラ之ヲ民法(第四編)及ヒ訴訟法ニ規定ス

法律ハ先ツ本條并ニ次ノニケ條ニ於テ不動
産ノ差押ニ関スル多クノ制限ヲ規定セリ
法律ハ其權利者カ自ラ借入質ノ權(左ノ附言
ヲ參觀ス可シ)ヲ有スル者ナルカ將ク之ヲ有
セザル者ナルカヲ區別シ又其負債ノ為メニ
借入質ト為シタル財産ハ尚ホ義務者ノ手ニ
存在スル場合ナルカ將ク既ニ保有者ナル地

人ノ手ニ移轉シタル場合ナルカヲ分別セリ
附言ノ常ニ法条共ニ其註解ノ文中ニ昏入質
ナル語ヲ記載セル時ニ必ズ特權若クハ昏
入質云々ト云ヘル意味ヲ已言セルモノト
之ヲ解セリル可カラズ蓋シ不動産ニ関シ
テ定ルル所ノ特權ニ即チ書入質ノ中別段
ノ特權アルモノニ外ナラザルカ故ナリ
不動産ノ差押ヲ行フニ必ズシモ權利者カ
此不動産ニ付キ昏入質ノ權ヲ有スルヲ要
セリルナリ如何トナレバ一般ノ原則ニ於テ
義務者ノ有スル終ニノ財産ニ皆其各權利者
ノ抵当タル可キカ故ナリ○左リナカク若シ
權利者カ義務者ノ有スル不動産ノ中或ル足

マリタル一個ニ付テ昏入質ノ權ヲ有スル
ニ止マリ其他ノ不動産ニ付テ昏入質ノ權
ヲ有セリル時ニ必ズ先ツ其中昏入質權ノ抵
当ニ充ラタル不動産ヲ擇ンテ始メ之カ差
押ヲ為サリル可キラス而ル後右不動産ノ價
額ニテ尚ホ辨清ノ不充分ナル場合ニ至リ更
ニ他ノ財産ヲ差押フ可キナリ
勿論昏入質ノ權ヲ有スル權利者ト虽氏等シ
ク通常ノ權利者タルニ相違アラザルナリ去
レトモ其通常ノ權利者タル所ニ特リ昏入質
ノ權ヲ以テ辨清ヲ受クルト能ハサル金高ニ
限ルナリ
去レハ昏入質ノ權ヲ有スル權利者カ既ニ其

借入質ノ抵當ニ充テラレタル財産ヲ賣掛
タル後ト虽氏尚ホ已レニ受リ可キ部分ノ不
足ニルニ於テハ更ニ他ノ不動産ヲ差押フル
トモ得可ク又他ノ権利者カ既ニ行ツタル差
押ニ自ラ参加スルトモ得可シ
権利者ガ其借入質ノ抵當タラカレ財産ニ付
キ差押ヲ行フ前光ツ其借入質ノ抵當ニ充テ
置キタル財産ノ差押ヲ為ス可シト云ヘル義
務ヲ規定シタル原則ハ義務者ノ既ニ移轉シ
タル財産ニシテ保有者ナル他人ノ手ニ在ル
モノニモ亦等シク之ヲ適施ス可シ
蓋シ借入質ノ権利者其借入質ノ権利ヲ有スル權
利者ニ追從ノ權ヲ授クルモノナリ然ルニ差

押ヲ受ケタル義務者ノ通常ノ権利者ハ概シ
テ借入質ノ権利者ガ常ニ其保有者ナル他人
ヨリ義務ノ辨済ヲ受クルニ付テ自ラ利益ヲ
得可キナリ○保有者ナル他人ハ其財産ノ買
主ナル場合モ亦カラン然ル場合ニ於テハ買
主具獲得ノ為ニ拂フ可キ代金ヲ以テ借入
質ノ権利ヲ有スル権利者ニ対シテ直ニ其義
務ノ辨済ヲ為スナラン○若シ之ニ及シテ借
入質ノ権利ヲ有スル権利者カ到底其借入質權
ノ効ニ因リテハ充分ニ全部ノ辨済ヲ受クル
ノ均等ヲ得ルヲ以テ敢テ最初ニ追從ノ權ヲ
行ハスニシテ先ツ借入質ノ抵當ニ充テカリシ
財産ノ差押ヲ為スルヲ得ルモノトセバ必ズ

其権利、高全部ニ付テ代金、配当中ニ参加
スルヲ得ルナラン果シテ然ラシニハ此各
入質、推ヲ旨セル権利者カ其賣拂ヲクル諸
事不^高産金ニ付キ得ル所、部分ハ其債主権
、中書入質、推ヲ行ツクル上尚ホ辨済ヲ受
タルニ至ラサリし部分ノモニ付テ自ラ代金
、配当中ニ参加スル場合ヨリモ尚ホ一層考
カル可シ。此、如キ結果ハ既ニ^廢除セシ所
ナリ
去シトモ或ル場合ニ於テハ追従、推ヲ最初
ニ行フト虽モ通常、権利者ニハ之カ為メニ
別段、利益アリカルト旨、即チ保有者ナル
他人ガ最早ヤ其獲得ノ代金ヲ賣主ナル義務

者ニ拵ツ可キ義務アリカル場合是ナリ此場
合ニ於テ若シ右ノ保有者カ自ラ昏入質、権
利者ニ対シテ更ニ義務ノ辨済ヲ為シタル時
ハ其義務者ナル賣主ニ對シテ後チ奪取擔保ノ訴
權ヲ行フトヲ得ルナラン通常ノ権利者等モ
亦敢テ其保有者ノ参加スルトヲ拒リテ能ハ
カル可シ果シテ然ル場合ニ至リテハ最早ヤ
保有者ノ参加スルモ昏入質、推ヲ有スル権
利者ノ参加スルモ通常、権利者ヨリ之ヲ觀
ル時ハ等シク同様ノ損失ヲ蒙ラカルヲ得ル
保有者ナル他人ガ最早ヤ自ラ獲得ノ代金ヲ
拵ツ可キ義務アリカルニ因リ右ノ如ク奪取
擔保ノ訴權ヲ有スルニ至ル場合ハ實際太ガ

少ナカラス。○保有者カ既ニ民法草案(第二秩)
ニ規定アル借入質権ヲ游存スル方法ニ関ス
ル法亦ニ循ハズシテ不注意ニテ賣主ニ其代
金ヲ直ニ辨済シタル場合、如キハ即チ其一
例ナリ。○此借入質権ヲ游存スル方法ノ事ニ
付テハ後テ民法草案第四編ニ至リ更ニ規定
スルモノアララン
又保有者己レニ其不動産ヲ受テタル代ハリ
トシテ自ら他ノ不動産ヲ与ヘ以テ相互ニ交
換ヲ為シタル場合、若シテ保有者カ贈遺ニテ
其不動産ヲ得タル場合、如キモ亦其例中ノ
著シキモノナリ
右等諸号ノ場合、於テ通常ノ権利者カ豫メ

追従ノ権ヲ執行ス可キ要求ヲ為スニ付テ自
ラ別段ノ利益ヲ有セザルニ於テハ別ニ故障
ノ申立ヲ為セテ無クシテ其書入質、抵当ヲ
ラカシム不動産ノ差押ヲ行ハシムルナラシ
法律ニ次ノ項ニ於テ権利者ガ數個ノ財産ニ
付テ書入質ノ権ヲ有スルニ其中或ル財産ハ
尚ホ義務者ノ手ニ存在スルモ他ノ財産ハ既
ニ他人ノ所有トナリタル場合、事ヲ記載セ
リ
此場合ニ於テハ権利者先ニ其義務者ノ手ニ
存在スル財産、ニテハ尚ホ充分ノ辨済ヲ
受ケルニ至ラザル時ニ非ラシハ他ノ財産ヲ
保有セシム他人ニ対シテ要求ヲ為スルヲ得ス

此法則、敢テ前段ノ規則ト抵触スル所アラ
ナルナリ如何トナレハ前段ノ場合ニ於テハ
既ニ昏入質ノ抵当ト为レタル財産ト其昏入
質ノ抵当ト为レタル財産ト、中其一方ヲ選
ニテ要求ヲ为ス可キモ、ナリシモ之ニ反シ
テ本項ノ場合ハ皆テ昏入質ノ抵当ト为レタ
ル財産ニ関シテ設ケラレタルモノナリノ爰
ニハ法律ハ尤程ニ權利者ノ詐偽ヲ行フテ
恐レホルナリ

且ツ夫レ保有者ナル他人ニ討シテ行フ昏入
質ノ権ニ関スル請求ハ義務者ニ討シテ行フ
不動産ノ差押ト全ク同様ナル法則ニ依テ之
ヲ为ス可キニ非ズ其間多少相異ナル所アリ

民法第四編及ニ訴訟法ニハ必ズ其相異ナル
要點ヲ明示スルナラン

第九十六條(○義務者カ他人ト未分ニテ所有ス
ル不動産即チ義務者ト他人トノ間ニ未分ニテ
存スル不動産ハ義務者一人ニテ所有スル財産
ニテ不充分ナル場合ニ非カレハ之ヲ差押ヘル
トヲ得ス
右差押ヲ为ス場合ニ於テハ總ニ、共同所有者
裁判所ヨリ定ムル期限内ニ其財産ノ分派ヲ行
フ可キ求メテ受ク可シ但シ若シ期限内ニ分派
ヲ为リ、ルニ於テハ右共同権利者相互ノ權利
ハ其財産ヲ糶賣シテ得タル代金ノ高、付キ之
ヲ算計ス可シ

爰ニ一取ニ其權利者、昏入質權ヲ有スルト
之ヲ有セカルトヲ區別セカルクナリ唯法律ニ
成ル可ク不動産ノ差押ニ因リ他人ノ權利ヲ
害セカル様回リタルノ此ノ茲ニ所謂他人
ナル者ハ即チ其差押ヲ受ケタル者ト俱ニ未
分ニテ其財産ヲ共有スル者ナリ○成ル可ク
未分ノ財産ヲ差押ヘカル様之ヲ避ケルヲ要
ス若シ止ヲ得ズンハ豫メ其共有者ニ求メテ
先ツ未分的ヲ止メシム可シ
若シ右ノ共有者カ其未分的ヲ止ムルヲ肯
シセル時ハ差押ヲ受ケタル者ノ擔當セル負
債ノ為メニ其未分不動産ノ全部ヲ賣拂フ可
シ而レ後右ノ賣拂ニ因リ得タル代金ノ高ニ

付テ相互ノ權利ヲ算計ス可キナリ
第九十七條○若シ差務者カ幼年ナルカ又ハ治
産ノ禁ヲ受ケタル者ナル時ハ其動産ノ三ニテ
尚ホ不充分ナル場合ニ非カレバ其不動産ノ差
押ヲ為ス可カラズ

法律ニ元来不動産ノ所有權ヲ保護スルヲ主
義ナリトモ此主義ヲ推シテ不動産ノ差押
ヲ為スノ前其動産物ヲ以テ其義務ノ償
ヲ得ルニ充テ用フ可シト云フハ必ズ其保
護ノ度ヲ失スルニ至ル○此方法ハ嘗テ佛蘭
西古代ノ法律中ニ之ヲ適施シタルヲアリシ
モ後々之ヲ廢止シタリ蓋シ此方法ハ義務者
ノ利益ヲ保護セシトスルノ余リ却テ大ニ權

利者ノ權利ヲ害フニ至ルヲ免カレサルカ故
ナリノ佛蘭西ニ於テハ唯リ知者ノ為ニ右
ノ方法ヲ存スルノ三佛蘭西民法第二十二百
六条日本ニ於テモ等シク此制限中ニ在リテ
之ヲ通用センテハ回リタリ
第九十八条ノ不動産ノ差押ハ第九條ニ定メ
ル規則ニ循ヒ辨済ヲ行フ可キ要決昏ヲ差出シ
タル後三日間ヲ経タル以上ニ非カレハ之ヲ為
ステ得ス
假リノ執行カヲ有スル裁判言渡書アリト虽モ
總テハ上訴期限ヲ経過シタル上且ツ其決定カ
既判ノ効ヲ得タル後ニ非カレハ差押ハタル財
産ノ賣拂ヲ為ス可カラズ

夫レ不動産ノ差押ヲ行フニハ必ス執行カヲ
有スル証昏アルヲ要シ且ツ豫メ要決ノ書ヲ
差出ヌヲ要スルト云フハ素ヨリ論ヲ待テ知
ル可キニ非ス必ス然ラザル可カラザルナリ
佛蘭西法律(第六百七十四條)ハ其差押ヲ行フ
ヨリ三十日以前ニ右要決昏ヲ差出ヌ可キ旨
ヲ規定セリ此期限ハ太夕長キニ失スルモノ
、如シ苟モ斯ノ如キ長キ論豫メノ時間ヲ与フ
ルニ於テハ義務者猥リニ其權利者ノ害トナ
ル可キ詐偽ヲ行ヒ以テ自由ニ其不動産ヲ他
ニ移轉スルテモアラン蓋シ法律ハ必ス其差
押ヲ行フタル以後ニカシタル移轉ハ非サレ
ハ敢テ其差押ヨリ以前ニ行フタル移轉ヲ廢

棄セシムルヲ允許セザルカ故ナリ且ツ仮
令ニ既ニ其差押ヲ為シタル後ト虽モ未だ登
記ノ式ヲ經ザル以前ニ行フタル移轉ハ等シ
ク取消ス可カラザルモノナルカ故ナリ(第六
百八十六條)

草案ハ要決昏ヲ差出ス時ヨリ差押ヲ為ス時
ニ至ル迄唯三日間ノ猶豫ヲ与フルニ過キズ
不動産ノ差押ハ未タ確定スルニ至ラズシテ唯
假リノ執行力ヲ有スルノミニ過キサル裁判
言渡昏ヲ以テ之ヲ為スヲ得ルモ之ニ及シ
テ不動産ノ差押ハ必ス確定ノ裁判言渡書
アルニ非サレバ之ヲ行フヲ能ハサルモノトセ
リ所謂ル裁判言渡ノ確定トハ即チ大審院へ

上告スル期限ニ至ル迄總テノ上訴期限カ既
ニ経過シ終ハリタル後ノ有様ヲ云フ
仙蘭西法律ニ因レハ大審院へ上告ヲ為シタ
ル時ト虽モ又其上告ヲ為ス可キ期限内(二ヶ
月間)タリト虽モ其力ヲ為メニ敢テ執行差押ヲ
行フニ付キ少しモ阻害トナラサル制規ナリ
ノ此方法ニテハ必ス大ナル不都合ナキヲ免
カレズ仮レ日本ニ於テ之ヲ採ラント欲セハ
宜シク多少ノ改正ヲ加ヘサル可カラスノ寧
ロ断然之ヲ廢止シテ更ニ裁判言渡ニ付キ上
告ヲ為シ得可キ時間中ハ決シテ不動産ノ差
押ヲ允許セズト云ヘル方法ヲ設クルニ若ク
サレナリ

第九十九条の不動産差押の調書は、第四百条に規定する要目の外、其差押へたる財産の明細書、建造物の性質、植付物の模様之を賃借スル者等ヲ詳カニ附記スルヲ必要トス

右調書は、必ス其地方に在ル郡區長ノ驗印ヲ受ク可シ

若シ差押へたる財産總テ繼續スルモノニシテ數邑又ハ數街ニ跨ル時ハ其財産ノ中重立タル部分ノ在ル土地ノ郡區長ノ其驗認ノ印ヲ附ス可シ

不動産ノ差押ニ付キ本条ニ特別ノ附記ヲ為ス可キ旨ヲ規定セル理由ハ一讀シテ以テ之ヲ了解スルヲ得可シ

第四百条の借家人、借地人又ハ其財産ヲ賃貸トセサル時ハ義務者ヲ以テ其財産ノ附託人或ハ番人ニ任スルヲ得可シ但シ其者差押ヘラレタル不動産ノ看守ヲ為スニ付キ第四百条ニ定メアル條件中ニアラサル時ト虽モ亦右同様ナリトス

不動産ノ関シテハ漫リニ之ヲ欺隱スルノ怨レアラサルカ故ニ法律ハ其番人ニ任ス可キ要件ニ付テ彼ノ動産ニ於ケルヨリモ一層緩ナル規則ヲ定メタリ土地ノ耕作人若ハ義務者本人ヲ選ニテ其番人ニ任

スル時ハ須臾モ其差押ヘタル土地ノ耕耘
ヲ息ノサルニ利アリ

第百一條ノ差押調書ノ字ハ義務者本人又ハ其
住所ニ之ヲ報知ス可シ

郡區長ハ其報知各ノ正本ニ頸印ヲ附ス可シ

義務者ノ不動産ニ付キ差押ヲ為ス時ハ必ス
之ヲ處分スルノ權ニ多少ノ影響ヲ及ホス可

キカ故ニ正当ノ法式ニ循ラ之ヲ其義務者
報知ス可シト云ヘル法則アルハ固ヨリ当然

ノ事ナリ

第百二條ノ差押ノ調書及ヒ報知各ハ差押人ノ
要求ニ因リ登記局ニ於テ之ヲ登記ス可シ

若シ差押ヘラレタル財産カ同一ナラサル登記

局ノ管轄内ニ在ル時ハ各部分ニ付キ別々ノ登
記ヲ為スヲ要ス

凡リ差押ヲ為シタル理由及ヒ其差押ニ因リ
生スル阻害ノ理由ヲ以テ他人即チ其差押ヲ

受ケタル者ト釣束ヲ為セル者ト對シテ故障
ノ申立ヲ為スニハ必ス其差押ヲ公示セザル

可カラザルノ登記ハ即チ最モ之ニ相当セル公
示ノ方法ナリ且ツ此方法ハ既ニ仏蘭西ニ於

テ実行セル所ナリ
登記ハ常ニ其財産所在ノ土地ニ在ル局ニテ

之ヲ行フモノナルカ故ニ若シ其差押ノ中ニ
局ノ同一ナラサル數多ノ管轄内ニ在ル諸多

ノ地區アルカ又ハ諸多ノ家屋アルニ於テハ

必ス其数ニ應シテ数個ノ登記ヲ為サ、ル可
カラズ

第百三条〇若シ新ノ権利者同一ノ財産ニ付キ
差押ヲ行フハ更ニ登記ヲ為スヲ必要トセ
ス但シ最初ニ行フタル登記ノ端傍ニ新ニ行フ
差押ノ事ヲ附記スルヲ要ス
最初ニ行フタル差押カ無効ニ帰スルカ又ハ隨
意ニ其差押ヲ解キタル時ハ新ノ権利者ハ当然
最初ニ行フタル登記ヨリ生スル利益ヲ得ルノ
権アリトス
若シ新ニ行フ差押ノ中ニ最初ノ差押ニ加ハラ
サル財産アルニ於テハ其超過スル高ノニ付
キ登記ヲ為ス可シ

動産物ニ関シテ同時ニ数個ノ差押ヲ為ス場
合アルニ等シク同一ノ不動産ニ付テ数個ノ
差押ヲ行フ場合ナキヲ得ズ〇第二ノ権利者
若シ其前ニ既ニ着手シタル差押アルカ为メ
ニ之ヲ頼ミテ自ラ別段ノ差押ヲ為サ、ル時
ハ或ハ不注意ノ過失アルニ至ルヲ無キヲ保
シ難シ最初ノ差押ガ場合ニ因リテハ全ク無
効ニ帰スルヲモアラシ又事宜ニ因リテハ最
初ノ差押人ガ其差押ヲ解止スルヲモアラシ
〇但シ新ニ行フ差押ノ为メニ更メテ登記ヲ
為スハ別段必要ノ事ニ非サルナリ〇去リ
テカラ若シ最初ノ差押ヲ止ムルニ際シ其不
動産ヲ以テ他人ニ移轉スルノ憂ナカラシメ

シカガノニハ必ス最初ニ為シタル登記ノ端
傍ニ第ニノ差押ヲ為シタル旨ヲ附記シ以テ
公ケニ其旨ヲ他人ニ了知セシムルヲ要スル
十リノ九レハ新ノ差押人ハ第一ノ差押カ消
滅ニ帰スルカ又ハ之ヲ止ムルノ場合ニ於テ
自ラ代位シテ最初ノ登記ニ預カリテ其利益
ヲ受ケルヲ得可シ
若シ又新タニ行フ差押ノ及ガ所カ最初ノ差
押ヨリ一層其區域ヲ廣フスル時ハ無論其起
過スル部分ニ付テ特別ノ登記ヲ為サ、ル可
カラズ
第百四条ノ差押ノ登記ヲ行フタル時ヨリ以後
ニ作為スルカ又ハ登記シタル物上権移轉ノ証

書又ハ物上権設定ノ証各アリト虽モ決シテ其
差押人ニ對シテモ又其他ノ権利者ニ對シテモ
之ヲ以テ故障ヲ惹フルヲ得ズ
差押ヲ為ス前後ニ物ハラズ民法ニ定メアル規
則(第三百六十條)ニ循ヒ権利者ノ權利ヲ害ス可
キ詐偽ヲ行フテ其登記ヲ為ス以前ニ右同様ノ
証各ヲ記シタル時ハ其権利者ノ求メニ因リ更
ニ之ヲ廢棄セシムルヲ得可シ
本條ノ法則ハ登記ヲ為スノ要ナル理由
ニ因リ且ツ其登記ノ式ヲ履行スルニ因リ當
然起ル所ノ結果ナリ○蓋シ差押人既ニ其差
押ヲ明示シタル以上ハ其差押ヲ受ケタル者
ト約束ヲ為ス者ハ仮令ニ自ラ善意ナル場合

ト虽モ尚ホ不注意ノ責ヲ免カル、一ヲ得ズ
 の尤レバ最早ヤ其差押ノアリタル一ヲ知ラ
 サリシ旨ヲ申立ラルカ又ハ之ヲ知ラサリシ
 証拠ヲ挙示シテ其責ヲ免カレントスルモ敢
 テ之ヲ受理ス可カラサルナリ
 且ツ未タ登記ヲ行フ前ニ其差押ヲ受ケタル
 者ト約束ヲ為シタル者ト虽モ若シ権利者ノ
 権利ヲ害ス可キ詐偽ヲ行フテ其財産ヲ移轉
 シタル場合ニ於テハ竟ニ自ラ其獲得ノ利益
 ニ預ル一能ハサル可シノ但シ爰ニハ民法ノ
 草案ニ規定セルカ如ク(第何条)其獲得者ナル
 他人カ無償ノ名義ニテ之ヲ得タル場合ト要
 償ノ名義ニテ之ヲ得タル場合トニ付テ區別

ヲ為サ、ル可カラスノ此最終ノ場合ニ於テ
 ハ其獲得者ナル他人カ自ラ詐偽ノ共謀者ナ
 ル時ニ非サレバ其権利ヲ失スル一無カニ可
 第百五条の若シ其不動産賃貸セラレタル家屋
 又ハ土地ナル時ハ其賃銀ハ登記ヲ為シタル日
 ヲリ之ヲ不動産ト看做シ以テ其不動産賣買ノ
 代金ト共ニ合シテ之ヲ分配ス可シ
 右ノ財産賃貸ニセサルモノナル時ハ差押人迄
 安裁判官ノ許可ヲ得タル上穀類ノ収納ヲ為サ
 シムルカ又ハ樹木ノ通常伐採ヲ行ハシメタル
 後其菓実ノ賣拂ヲ為サシムル一ヲ得可ク又ハ
 其土地ニ在ル低ニテ賣拂ハシムル一ヲ得可シ

而シテ其賣払ニテ得タル代金ノ高ハ債貸ノ代
金ニ等シク附託ヲ為ス可ク且ツ之ヲ分配ス可
シ

本条ノ法則ハ差押ヲ為シタル者ノ為メニ其
不動産ノ入額ヲ保護スルノ意ニ出ニタルモ
ノナリ

法律ハ此事ニ付テ其債貸シタル不動産ナル
カ將々債貸ト為サ、ル不動産ナルカヲ區別
スルナリ

条文ハ自ラ明瞭ナリ別ニ説明ヲ下スニ及ハ
ズ

第百六条の差押人ハ其不動産ヲ糶賣ニテ賣払
ハシメントシカメニ登記ヲ為シタル日ヨリ一月

内ニ一ノ請求者ヲ裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

右請求者ニハ九ノ諸件ヲ附記スルヲ要ス

第一、既ニ執行シタル訴訟手續各類ノ要目

第二、賣払ノ日附

第三、賣払ノ手續ヲ為ス権利者ノ附々直段

第四、差押ヘタル財産ニ関スル租税表ノ抜唇

第五、其他賣払ニ関スル責務及ニ条件就中糶

賣ノ代金ニ准シテ納ム可キ百ニ付千幾分ノ補

足金ニシテ其訴訟手續ノ入費ニ充ツ可キ金高

法定ノ期限内ニ右ノ請求ヲ為サ、ル時ハ差押

ヲ受ケタル者ヨリ其差押人ノ費用ニテ差押ヲ

止メントシト要ムルヲ得可シ

夫レ財産ノ差押ヲ行フタル後賣拂ヲ為スル無ク

シテ際限ナク之ヲ其儘ニ棄テ置クハ敢テ當ラ得タル
処分ニ非ズ○法律ハ一ヶ月間ニ其賣払ヲ行フ可キ要
求ヲ為サンコトヲ欲スルナリ若シ此要求ヲ為サル時ハ最
早ヤ其差押ヲ解止シタル者トス

右ノ要求各ニ記ス可キ諸件ニ関スル理由ハ
容易ニ之ヲ會得スルコトヲ得可シ

第一、既ニ行フタル訴訟手續ノ諸件ハ即チ其要求ノ因リテ
起ル所ノ基本ナリノ就中其日附ヲ明示セル差押及ヒ
其登記ノ如キハ右諸件中ノ最モ重ナル者ナリ

第二、常ニ賣払ノ日ヲ定ム可キ要求ヲ為ス可
キ者ハ即チ其差押人ナリ但シ裁判所ニ於テ
ハ其関係人ノ意見ヲ聞キタル上ニテ右ノ要
求各ニ記載セル賣払ノ日ヲ換ヘルコトヲ得可

シ

第三、差押人ハ自ラ一ノ代金ヲ定メテ其糶賣
ノ附ケ直段ノ標準ヲ示ス可シ○但シ裁判所
ニテハ右ノ場合ニ等シク其附直段ノ高ク増
減スルコトヲ得可シ

第四、其財産ニ関スル将来ノ地租ハ皆糶賣ノ
買受人ヨリ之ヲ納ム可キ力故ニ豫メ其租稅
ノ高ヲ示シ置クコトヲ要ナリトス

第五、糶賣ノ買受人ハ概シテ其差押手續ノ入
費及ヒ賣拂入費ノ中自ラ多少ノ部分ヲ擔當
スルモノナリ故ニ亦豫メ之ヲ告示スルコト必
要ナリトス○仏蘭西ニ於テハ糶賣ノ買受人
ハ自ラ悉皆ハ入費ヲ擔當ス可キ制規ナリ○

此ノ如クスル時ハ余リ買受人ノ任ヲ過重ナ
ラシムルカ故ニカノニ糶賣ノ競争ヲ衰弱ナラ
シムルノ弊ナキヲ得ズ。今日日本ノ為メニハ
其糶賣代金ノ中ニ百分ノ幾部ヲ加ヘテ以テ
右ノ入費中ニ充ツ可キモノトセリ。其他不足
ノ入費ハ皆ナ其糶賣ニ因リ得タル代金中ヨ
リ之ヲ引去ル可シ故ニ此部分ハ畢竟其權利
者等ニテ之ヲ擔任ス可キナリ但シ此等ノ權
利者ハ其債主權ノ中未タ辨清ヲ受ケルニ至
ラザル部分ニ付テハ差押ヲ受ケタル者ニ對
シテ更ニ之ヲ要求スルヲ得可シ
右ノ如ク糶賣ノ買受人ガ常ニ擔當ス可キ租
税及ニ其他ノ責任ハ後段ニ記載セル箇条書

ニ之ヲ登載ス可シ
第七條ノ右請求各ハ差押ヲ受ケタル義務者
及ニ其差押ヘタル財産ニ付キ記入シタル特權
又ハ書入債ノ權ヲ有スル權利者ニ五日內ニ之
ヲ報知スルヲ要ス
且ツ右等ノ者ニハ之ト同時ニ左ノ諸件ヲ記シ
タル告知書ヲ渡ス可シ即チ其財産ノ現在スル
土地ノ裁判所ニテ開ク公ケノ訟廷ニ出席ス可
キ事請求各ノ朗読ヲ為ス時ニ出席ス可キ事并
ニ其賣払ノ条目要件及ヒ日附等ニ付キ各自ノ
意見ヲ述フル事ナリ
裁判所ニテハ此事柄ニ関シテ双方互ニ申立ル
故障及ニ其他ノ諸件ニ付決定ヲ為シ以テ其地

方ニ在ル新聞紙ノ中一ヲ選テ其箇条書ヲ改メ
タル要目ヲ廣告ス可キ旨ニ其掲示ヲ為ス可
キ旨ヲ命ス可シ但シ此裁判所ノ言渡ニ付テハ
控訴ヲ為スコトヲ許サス

成ル可ク責キ價ヲ以テ賣払ヲ為スニ付テ自
テ利益アル者ハ敢テ其差押人一人ニ止マラ
サントナリ其外差押ヲ受ケタル者モ亦成ル可
ク代金ノ多額ヲ得ルニ付テ利アリ如何トナ
レバ多クノ金高ヲ得レバ從テ其負債ヲ辨済
スル所モ亦之ニ准シテ一層多クハ可キハ故
ナリ又其財産ニ付キ特權若リハ各入質權ヲ
有スル權利者タルト通常ノ權利者タルトヲ
問ハズ皆等レク其代金ノ多額ヲ得ルニ付テ

利益アリノ是レ其關係人ヲシテ賣払ノ条件
ニ付キ各々意見ヲ述ヘシムル為メニ之ヲ認
廷ニ呼出スコトヲ必要トスル所以ナリ但シ
通常ノ權利者ハ慥カニ之ヲ認知スルコト能ハ
サルガ故ニ常ニ其催促ヲ為スル特リ特權ノ
記入若クハ書入質ノ記入ニ因リテ真ニ其權
利者タルコトノ確実ナル者ノミニ限ルナリ
右ノ認廷ニ於テ為ス可キ事柄ハ余リ多カラ
サル様必ス之ヲ制限スルヲ要ス即チ其請求
書中ニ記載セシ總テノ諸件ヲ朗読スル事糶
賣ヲ行フ日附附ケ直段并ニ其他賣払ニ関ス
ル諸事ノ条件ニ付キ關係人ヨリ意見ヲ申立
ル事及ビ裁判所ニテ箇条各ニ記載セル要件

ヲ允許スル為メ又ハ之ヲ却付スル為メ若クハ之ヲ変更スル為メニ言渡シタル決定ノ事ノミニ限ル可キナリ

若シ又既ニ行フタル手續ノ諸件中ニ多少不當ノ処方アルニ於テハ裁判所ニ於テハ場合ノ輕重ニ循ヒ或ハ其差押ヲ取消スルモアラシク或ハ其不當ノ処置是ニ之レヨリ以後ニ行フタル諸件ノミヲ取消スルモアラン但シ差押人ハ前數条ニ定メアルカ如ク更メテ其取消サレタル諸件ヲ行フコトヲ得可シ

第百八条〇揭示ハ左ノ場所ニ之ヲ為ス可シ
第一 差押ヲ受ケタル義務者住所ノ門前
第二 差押ヘタル建造物ノ表門

第三、義務者ノ住所及ヒ差押ヘタル財産ノ全部又ハ一部ノ現在スル土地ノ管轄内ニ在ル郡役所區役所及ヒ治安裁判所ノ門前

第四、右郡區内ニ在ル重立タル公ケノ場所

第五、差押ヲ受ケタル者ノ住所ヲ管轄スル裁判所差押ヘタル財産ノ現在スル土地ヲ管轄スル裁判所及ヒ其賣拂ヲ行フ可キ裁判所等ノ門前

賣私、其ニ其日附及ヒ附ケ直段ヲ公告スル為メニ行フ揭示ヲ為ス可キ場所ハ隨分考ケレバ法文ヲ説明スル為メニ一々之ヲ採リテ辨陳スルハ無要ノ事ナリト思考ス

第百九条〇揭示ヲ為シタルコトハ登記局ニ在ル

吏員ノ中一人ノ申述書ヲ以テ之ヲ証ス可シ且
ツ郡區長ハ其揭示書ノ中一通ニ驗認ノ印ヲ附
ス可シ此郡區長ノ驗認ヲ為シタル揭示書ハ廣
告ヲ記載シタル新聞紙一葉ト共ニ之ヲ唇類ニ
合併ス可シ

法律上ニ定メアル總テノ場所ニ於テ正シク
揭示ヲ為シタル者ヲ公然ト証定スルハ無論
必要ノ事ナリ

第百十條ノ右ノ公示ハ其糶賣ヲ為ス前少ナク
トモ十五日以上多クトモ三十日以下之ヲ為ス
可シ

右ノ揭示ヲ為スハ其賣払ヲ為ス可キ日ヨ
リ余リ遠隔スルモ其當ヲ得タルモノニ非ズ

又余リ接近スルモ其當ヲ得タルモノニ非ズ
故ニ本條ニ定メアルカ如ク必ス相當ノ時間
ヲ計ラサル可カラズ

第百十一條ノ差押ヲ受ケタル者及ヒ差押人ハ
自己ノ入費ヲ以テ自ラ要用ナリト思考スル場
所ニ揭示ヲ為サシムルタメニ裁判所ニテ定メ
タル揭示ノ數ト同様ナル數ニ至ル迄之ヲ受取
ルヲ得可シ

本條ニ指示スル者二名ハ其關係人ノ中最モ
重ナルモノナリ各々ラシテ其要用ナリト思
考セル場所ニ揭示ヲ為サシムルト云フハ至
極適當ノ事ナリノ裁判所ニ於テハ常ニ成ル
可ク入費ノ少ナカラシムルヲ圖リ以テ其者等

渡ノ可キ揭示ノ数ヲ定ム可シ。且ツ裁判所ニテハ事宜ニ因リ第百七条ノ規則ニ循ヒ其揭示ノ全数ヲ定ムルヲ得可シ。

第百十二条○糶賣ハ何レノ理由アリト虽凡第百七条ニ定メアル日附以前ニ之ヲ行フヲ得

糶賣ハ重大ノ事故アル確証アルニ於テハ裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ遅延スルヲ有ル可シ。此場合ニ於テハ新ニ其公示ヲ為スヲ要ス。

第百十條ノ規則ヲ以テ定メアル最短ノ期限及最長ノ期限ハ之ヲ半期ニ減少ス可シ。仮令ニ如何ナル正当ノ理由アリト虽凡豫メ確定シタル日附ヨリ以前ニ糶賣ヲ行フハ素

ヨリ不当ノ処分ナルヲ敢テ論ラ俟タサルナリ之ヲ許ルス時ハ必ス多クノ買主ヲ得スニテ止ムヲアラン。

之ニ反シテ糶賣ハ正当ノ理由ニ因リ常ニ之ヲ引延スルヲ得可シ。但シ新タニ其公示ヲ為スノ必要ナリ。此ノ如クスル時ハ豫メ其延期アリレテ了知セカリシ者が若シ定マ

リタル當日ニ来リテ必ス其旨ヲ認知スルナラシム。新タニ行フ公示ハ既ニ行フタル公示ニ合保スルカ故ニ初メニ定メタル期限間ニ之ヲ減縮スルヲ得可シ。

第百十三條○糶賣ノ為メニ指定セル日時ニハ

其財産ノ現在スル土地ヲ管轄スル裁判所ノ公
廳ニ於テ其處方ヲ行フ可シ但シ原告人ヨリ新
ノ請求ヲ為スルヲ要セサルナリ

仏蘭西先ニ改竊諸国ニ於テ凡テ差押ヘタル
不動産ヲ裁判所ノ公廳ニテ賣払フ習慣ハ遠
ク古代ヨリ傳來セシモノナリ○是レ蓋シ此
不動産ノ賣払ニ関シテ法律上ニ定メアル諸
多ノ規則ヲ正ク守ラシムルニ最モ都合宜キ
方法ナリ

第百十四条○原告人其申立ヲ止メタル時ハ執
行力ヲ有スル証昏ヲ所持スル他ノ権利者自ラ
右原告人ノ権利ニ代位シ以テ其終ニテ差押ヲ
行ハシムルヲ得可シ

若シ諸多ノ権利者ノ間ニ権利ノ競争アル時ハ第百
三条ニ規定アルカ如ク其中既ニ第二ノ差押ヲ為シタ
ル者ヲ以テ当然先取ノ権アリトス

若シ又諸多権利者ノ中何人タリトモ右ノ場合中ニ
在ラサル時ハ不動産ニ付キ一ノ特権又ハ一ノ昏入質
権ヲ有スル者ヲ以テ先取ノ権アリトス又若シ其者モア
ラサル時ハ請求者ノ中一人最モ重要ナル債主権ヲ有
スル者ヲ以テ先取ノ権アリトス

充分ノ辨済ヲ受ケタルト否トヲ問ハス差押人其訴
訟ヲ放棄スルニ因リ更ニ新ノ差押ヲ為スルヲ必要
ナリトスルハ敢テ其當ラ得タルモノニ非ズ若シ之ヲ
要スルトセバ漫リニ無要ノ入費ヲ増スニ至ラン
去リテ又其差押ヲ受ケタル財産が其終義務者ノ

手ニ復スルモノトスルモ亦不都合ナリ若シ果シテ然ラシニ
ハ其義務者ハ要意ニ因リ又ハ善意ニ因リ更ニ之ヲ
他ニ移轉シテ以テ多少別ノ権利者ヲ害スルニ至ラン
是レ其他ノ権利者ニハ常ニ自ラ訴権ニ代位
スルノ権アリテ且ツ其終ニテ訴訟ヲ引続リ
テ得可キ権アル所以ナリ○但シ此權利ノ
屬ス可キハ特リ執行力ヲ有スル証各ヲ所持
スル權利者ノミニ限ルナリ如何トナレハ第
二ノ差押ヲ為シ得可キモノハ特ニ此等ノ權
利者ノミニ限ルカ故ナリ
若シ右ノ場合ニ於テ權利者数人アル時ハ法
律ハ先ツ第一ノ差押人ガ其差押ヲ解止スル
以前ニ既ニ第二ノ差押ヲ為シタル者ヲ選テ

先取ノ権アリトセリ若シ其間ニ第二ノ差押
ヲ為シタル者アラサル時ハ其差押ヘラレタ
ル不動産ニ付キ特權又ハ存入質ノ權ヲ有ス
ル者ラシテ先取ノ権アルモノトセリ若シ又
此特別ナル先取ノ權ヲ有スル者アラサル時
ハ權利者ノ中自ラ得可キ利益ノ最モ多キモ
ノヲ選テ先取ノ権アリト為セリ
第百十五條ノ第百三條ニ記載アル場合ノ外ニ
於テハ当然ノ代位アルヲ無レ但シ右ノ代位ハ
法律上ニテ請求ヲ為スルヲ允許セル諸權利者
ノ請求ニ因リ裁判所ニテ之ヲ言渡スルヲ得可シ
何レノ場合トモ代位アル時ハ第百十二條ニ規定アル期
限及ビ法式ニ從ヒ糶賣ヲ為スルヲ停止スル者トス

差押ヲ受ケタル者ノ要求ニ因リ其差押ノ登記
ヲ塗抹シタル時ハ最早キ右ノ代位ヲ要ムルコト
ヲ得ズ

元来当然ニ起ル所ノ代位ハ即チ原則ノ例外ナリ本
条ニ於テモ明カニ第百三条ニ意ヲ寓スルカ如ク所
謂当然ノ代位ナルモノハ未タ最初ノ差押ヲ解止
セサル中ニ更ニ第二ノ差押ヲ爲シ且ツ其登
記ヲ爲シタル場合ニ生スルモノナリ
之ニ及シテ通常ノ場合ニ於テハ概シテ既ニ最初ノ
訴訟ヲ抛棄シタル後ニ至リ更ニ他ノ権利者ヨリ
引続テ之ヲ爲サンコトヲ申立ルコト多シトスノ所謂
裁判上ノ代位ナルモノハ即チ此場合ニ在リ
法律ヲ以テ権利者ヨリ際限ナク右ノ代位ヲ

要求スルコトヲ得ルト規定スルハ素ヨリ其当
ヲ得タルモノニ非ズ○故ニ差押ヲ受ケタル
者が最初ノ差押ノ登記ヲ取消サシメタル時
ヲ以テ右ノ要求ヲ爲ス可キ時間ノ最極ノ限
リト爲セリ○常ニ能ク注意ヲ爲ス者ナラン
コトハ稍々違カニ右ノ要求ヲ爲スナラン
第百十條ノ裁判所ハ糶賣ヲ行フ前先ツ法則
ニ定メアル如クニ法式及ヒ期限ヲ守リテ公示
ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ以テ其旨ヲ言渡ス
可シ
然ル後登記ハ買受人ト差押ヲ受ケタル者トノ
間ニ契約ヲ成ス爲メニ設ケアル箇条ヲ朗読
ス可シ

差押ヲ受ケタル者差押人及ヒ其不動産ニ付キ
特權又ハ唇入質ノ記入ヲ為シタル權利者皆承
諾ヲ為シタル以上ニ非サレハ何レノ変更トモ
氏決シテ之ヲ為スル能ハサル者トモ又依令ヒ
変更ヲ為ス場合トモ氏其糶賣ヲ停止スルル無
シ
法律ハ本条ニ移リテ糶賣ニ関スル法式ノ事
ヲ規定セリ
訟廷ニ於テハ先ツ亦百八条乃至亦百十条ニ
定メアル如ク正シク法式ヲ履行シタルトモ
示ノ為メニ定メアル諸条ノ条件ヲ遵守シタ
ルトモ調査シ次ニ買主ノ為メニ設ケアル箇
条各ノ朗読ヲ為ス

法律ハ此事ヲ形様シテ買主ト看做ス可キ糶
賣ノ買受人ト賣主ト看做ス可キ差押ヲ受ケ
タル者トノ間ニ於テ一ノ契約ヲ為サレメン
カ為メナリト云ヘリ
元來糶賣ノ箇条各ハ最初一旦裁判所ニ於テ
確認シタルモノナルカ故ニ最早マ其裁判所
ニテモ之ヲ変更スルルヲ得サル可ク又其関
係人タリトモ凡一回ノ者ニ謀ラズシテ各々
ニテ之ヲ変更スルル能ハサル可シ去レトモ
直接ノ関係人一日兼諾ノ上ニテ其変更ヲ為
サントスル時ハ敢テ之ヲ拒ム可キ理アラサ
ルナリ
法律ハ茲ニ右等ノ関係人ヲ明示セリノ差押

ヲ受ケタル者及ヒ差押人ノ外法律ハ更ニ其
不動産ニ付キ既ニ記入ヲ為シタル權ヲ有ス
ル權利者ヲ加ヘタリ

通常ノ權利者ニシテ嘗テ其差押ニ参加セシ
ニ非ズ且ツ未ダ已レニ代位ノ權ヲ得タルニ
非ザリシ者ハ法律上ニ於テ尚ホ認定セサル
モノナリ丸レバ此等權利者ノ承諾ハ固ヨリ
之ヲ要スルニ及ハサルナリ

法律ハ敢テ箇条書ヲ変更スルヲ記シタル
次ニ其糶賣ヲ延期スルヲ俟セ記セサルナ
リ如何トナレバ此延期ヲ為ス時ハ其承諾ヲ
得ルニ難キ單純ナル通常ノ權利者ニ至ル迄
多少ノ損害ヲ蒙ルニ至ル可キカ故ナリ

丸レハ延期ヲ為スニハ第百十二条ニ規定セ
ルカ如ク必ス重大ナル理由アルヲ
要スルナリ而シテ之ヲ允許スルハ特リ其裁
判所ノミニ限ル敢テ關係人一日ノ承諾アル
ヲ要セサルナリ

第百十七条ノ總テ差押ヲ受ケタル者ニ対シテ
其差押ヘラレタル不動産ノ以前ノ移轉ニ付キ
自ラ解除ノ權回復ノ權又ハ廢棄ノ權アリト主
張スル者ハ糶賣ノ為メニ開廷スル前ニ裁判所
ノ登記局ニ其請求ヲ為ス可シ否ラサレバ糶賣
ノ買受人ニ対シテ其訴權ヲ失スル者トス
右ノ請求ヲ相当ノ時間ニ差出シタル時ハ裁判
所ニテハ其訴權ヲ證明セシムル為メニ期限ヲ

定ム。此期限ヲ経過シタル以上ハ其糶賣ノ処
置ヲ為ス可シ。但シ其請求者ノ所為ニ拘ハラ
サル重要ナル理由アルニ於テハ右ノ期限ヲ延
ハス可シ。

場合ニ因リテハ差押ヲ受ケタル者自ラ其不
動産ノ所有權ヲ有スルモ尤ニ記スル三個ノ
訴權中其一ニ拠リテ或ハ其權利ヲ失スルニ
至ルヲアラシム即チ解除ノ訴權廢棄ノ訴權及
ヒ回復ノ訴權是レテリ蓋シ此等ノ訴權ハ皆
既往ニ溯リテ其獲得ヲ廢滅スル致及ノ効ア
ルモノナリ。

法律ハ右等ノ訴權ヲ行ハントスル者ヨリ豫
メ開廷ノ前ニ其請求ヲ為サンコトヲ欲セリ若
シ之ヲ為サル時ハ糶賣ノ買受人ニ對シテ
其訴權ヲ失スルモノトセリ但シ其代金ノ高
ニ付キ更ニ損害ノ賠償ヲ要ムルコトヲ得ルナ
ラン。

仮令ニ相当ノ時間中ニ右ノ請求ヲ為シタル
場合ニモセヨ之カ為ノ際限ナク其糶賣ヲ
引延スルハ敢テ其當ヲ得タルモノニ非ス是
レ裁判所ニ於テハ右ノ請求ヲ裁判ス可キ為
メニ一ノ期限ヲ定ムルヲ要スル所以ナリ。○
去リナガラ又或ハ原告人ノ所為ニ非ズレテ
全ク被告入若クハ裁判官ノ所為ニ因リ右ノ
定期ニテ不充分ナル場合モアラシ故ニ時宜
ニ因リテ其延期ヲ為スコトヲ允許セリ。

第百十八条の不動産の箇条各を記載する附ケ
直段ノ高ニテ糶賣ニ差出ス可シ

若シ更ニ競リ直段ヲ附ケル者アラサシ時ハ右直段ノ高ヲ提
供スル者ニ糶賣ヲ為ス可シ

附ケ直段ヨリ更ニ高價ヲ附ケルト虽モ必ス左ノ割合ニ
等レキカ又ハ此割合ヨリ高キ時ニ非サレバ之ヲ許ルサレ者
トス

附ケ直段五十円又ハ其以下ナル時ハ、五十銭

附ケ直段五十円以上百円マテ、壹円

附ケ直段百一円以上二百円マテ、二円

附ケ直段二百一円以上三百円マテ、三

円

附ケ直段三百一円以上四百円マテ、四

円

附ケ直段四百一円以上五百円マテ、五円

附ケ直段五百一円以上千円マテ、十円

附ケ直段千一円以上二千円マテ、二十

円

附ケ直段二千一円以上三千円マテ、三

十円

其他ハ皆之ニ准シテ附ケ直段ノ高千円又ハ千

円ノ分数毎ニ拾円ヲ増加ス可シ

高價ヲ附クル右ニ記列シタル金高ノ中其一

ノ最高点ヲ起過スル時ハ同一ノ割合ニ循テ直段ヲ

増加シテ更ニ高價ヲ附クルヲ要ス

箇条各ニ記載セル附ケ直段ハ即チ其糶賣ノ

扱テ基ク所ノ初歩ナリ○糶賣ノ買受人トナ
ルニハ必スシモ右ノ附ケ直段ニ多少ノ高ヲ
加ヘルヲ要セサルナリ○是レ即チ仏蘭西
成典ノ法則ト相異ナル一点ナリ蓋シ仏蘭西
成典ニ因レハ若シ買主一人モアラサル時ハ
差押人ヲシテ買受人タラシムルト云ヘル成
規ナリ(第七百六条)

此法律草按ニ於テハ仏蘭西成典ノ定ムルカ
如キ法則ヲ許ルサ、ルナリ(後段ニ記スル第
百二十一條ヲ參觀ス可シ)是レ兩法ノ間ニ於
テ字義ノ相同シカラサル所アル所以ナリ場
合ニ因リテハ最初ニ提供シタル代金ヲ以テ
糶賣ヲ為スコト有リ故ニ若シ此代金が附ケ

直段ノ高ト同様ナル時ハ敢テ之ヲ競リ賣(ア
ンシエール)ト称スルヲ得サル可シ蓋シ競
リ賣トハ代金ヲ増加スルト云ヘル義アルカ
故ナリ附ケ直段ノ高ヲ超過セル提供アルニ
非サレバ競リ賣アリト唱フルヲ得ズ而シ
テ第一ノ競リ賣直段ノ高ヲ超過セル第三ノ
提供ヲ称シテ競リ上ケ直段(シユルアン)シエ
ール)ト唱フルナリ之ニ反シテ仏蘭西法律
ニテハ既ニ第一ノ提供ヲ称シテ競賣リ直段
ト云フ而シテ第二ノ提供ヲ指シテ競リ上ケ
直段ト唱フルナリ
競賣リ直段タルト競リ上ケ直段タルト
ハ僅カニ二三銭ノ差異アルニ因リ又ハ僅

カニ二三円ノ差異アルカ為メニ必ス少々タ
リトモ多クノ提供ヲ為シタル者ヲ選テ直ニ
糶賣ノ買受人ト定メントスルハ決シテ其旨
ヲ得タルモノニ非ズ故ニ法律ハ敢テ之ヲ許
ルサ、ルナリ

是レ本条ニ於テ代金ノ割合ヲ定メタル表ヲ
示シ以テ糶賣ヲ買受人トナルニハ必ス此表
ニ依テ代金ノ高ヲ述フ可ント規定セル所以
ナリ

競リ上ケ直段ノ高ハ悉ク一様ナルニ非ス最
初ニ定メアル附ケ直段ノ高カ次第ニ多クナ
ルニ依テ其競リ上ケ直段ヲ次第ニ高クスル
様ノ方法ナリ而シテ其増加ス可キ高ハ常ニ

百分ノ一ナリトス去リナカラ常ニ事ヲ簡便
ナラシムルカメニ各級ニ定メアル最上ノ高
ナル整数ニ付テ其更ニ増加ス可キ百分一ノ
割合ヲ算計スルモノトセリ但シ真ノ附ケ直
段ノ高カ其整数ノ高ニ達セザル場合ト虽凡
亦右同様ナリトス
尤レバ表ノカ一級ニ記載セル五十円若クハ
其以下ノ附ケ直段ナレバ概シテ競リ上ケ直
段ヲ五十円(即チ百分ノ一)ト為セリ但シ其真
ノ附ケ直段ガ二十五円或ハ三十円ナル場合
ト虽凡亦右同様ナリトス
右ノ算計ヲ為スニハ常ニ各級中最上ノ高ヲ
以テ之カ基本トナス。其他五十一円以上百

田 = 至ルモ又百一田以上二百田 = 至ルモ以
下皆ナ石目様ノ割合ニ従フ可シ
五百一田ヨリ以上ハ百ノ教位ヲ以テ其階級
ヲ定ムルニ非ス五百一田乃至千田ノ間ニハ
唯一級アルノミ而シテ真ノ附ケ直段ハ六百
田ナリトモ又七百田ナリトモ之ニ拘ハラズ
競リ上ケノ增高ヲ限リテ十田ナリトス即チ
千田ノ高ニ付テ算シタル百分一ノ高ナリ
又千一田以上ニ至レバ皆チ千ノ教位ヲ以テ
其階級ヲ分ツ而シテ其附ケ直段ハ或ハ千二
百田ノ事モアラシ又千五百田ノ事モアラシ
ト虽此之ニ拘ハラズ常ニ最上ノ教二千田ニ
付テ右ノ如ク百分ノ一(二十田)ヲ算計スルモ

ノトセリ○是レ即チ法律上千田又ハ千田ノ
分數毎ニ十田ツ、ノ高ヲ増加ス可シト云ヘ
ル法則アル所以ナリ
然レ氏前ノ競リ直段カ既ニ最初ニ着手シタ
ル階級ニ在ル最上ノ高ヨリ以上ノ代金ヲ起
退スルニ於テハ最早マ其附ケ直段ヲ以テ糶
賣ノ有効ナラシムル為メニ定ム可キ增高ノ
基本ト為ス可カラス○此場合ニ於テハ其次
ノ階級ニ在ル最上ノ高ヲ以テ其競リ直段ノ
基本ト為ス可シ
實際糶賣ヲ為ス毎ニ成ル可ク不都合ナカラ
シムル為メニハ右等ノ要点ニ付キ法律上必
ズ正確ナル規則ナカラサル可カラス若シ其

法則ニシテ苟モ當ヲ得サルニ於テハ必ス其
賣払ニ因リテ好結果ヲ得ルヲ難カラシ
第百十九条ノ總テ糶賣ニテ自ラ價ヲ附ケタル
者ハ已レヨリ更ニ高價ヲ附クル者アルニ至リ
自ラ買受タルノ義務ヲ免カントモ、若トス但シ其
高價ヲ附ケタル以下ニ記スル理由ニ因リ無
効ナリハ云渡サレタル時トモ、亦右同様ナリ
トス

若シ既ニ糶賣ノ直段ヲ附ケタル高ヨリ以上
ニ超過スル金高ニ更ニ其價ヲ競リ上ケル者
アル時ハ最初ニ競リ直段ヲ附ケタル者直ニ
其約束ノ義務ヲ免カントモ、モトトス
去リナカラ人或ハ疑ハシキ結果ヲ得ルニ至

ルニハ必ス其競リ上ケタル直段ノ有効ナル
事實ニ関シテ之ヲ定メサレ可カラスト是レ
蓋シ尤ノ原則ニ拠リテ起ル所ノ説ナリ即チ
糶賣ハ新ノ約束カ有効ナル事ニ関シテ義務
者ノ替換スルニ因リテ成就ス可キ文改ノ一
種ナリト云フ是ナリト云レトモ法律ハ全ク
此主意ヲ抛却セリ茲ニ規定セル所ハ即チ一
ノ競リ直段ヲ超過セル他ノ競リ上ケ直段ア
ル時ハ最初ノ競リ直段ハ最早マ其財産ヲ移
轉スル者ヨリ之ヲ觀ルモ又其訴訟ヲカス者
ヨリ之ヲ觀ルモ全ク抛却シ去リタルモノト
之ヲ看做ス可シト云ヘル法則ナリ是レ恰モ
此直段ヲ附ケタル本人カ更メテ之ヲ辞却シ

タルト同様ナル有様ナリ也レバ最初ノ競り
直段ノ高ヲ超過セム競り上ケ直段カ或ル理
由ニ因リテ早晚廢滅ニ帰スルニ至ルト虽凡
之ヲ為ノニ敢テ最初ノ競り直段ヲ再認セシ
ムルノ効アルニ非ス○蓋シ前キニ競り直段
ヲ附ケタル者一旦既ニ其約束ノ義務ヲ免カ
レタリト省做サレタル以上レ更ニ已レノ意
アルニモ非スレテ再ヒ其義務ヲ擔當スルニ
至ル可キ理アル可カラサルカ故ナリ又或ハ
其者既ニ認廷ヨリ出テ去リタルトモアラン
然ル場合ニ於テハ最早ヤ之ニ関シテ少シモ
糶賣ノ法或テ履行スルト能ハサル可シ
第百二十条ノ糶賣中ハ大概一分時間燃へ続ク

可キ小蠟燭(火)數箇ヲ裁判所及ヒ公衆ノ面前ニ
點ス可シ

若シ蠟燭三箇ノ漸次ニ尽キタル時最後ニ價ヲ
附ケタル者ヨリ更ニ高價ヲ附タル者ナキニ於
テハ其最後ニ價ヲ附ケタル者ヲ以テ糶賣ノ買
受人ナリト云渡ス可シ

最初ノ附ケ直段ヲ承諾スル者アル時又相当
ノ競り直段ヲ附ケル者アル時又相当ノ競り
上ケ直段ヲ附ケル者アル時ニ際シ直ニ急ニ
其糶賣アリタル旨ヲ云渡サントスルハ敢テ
至当ノ処分ニハ非サルナリ○又除リ永々數
更ニ競り直段ヲ附ケル者アルニ至ル迄過度
ノ猶豫ヲ為スモ亦敢テ其當ヲ得タルモノニ

非ス○又其訟廷ヲ主トシ裁判官ヲシテ之ニ
関シテ充分ノ特権アラシムルトスルモ亦敢
テ策ノ得タムモノニ非カレナリ蓋シ若シ其
裁判官ニ右ノ時間ヲ定ムル特権アリトスル
時ハ其時間カ余リ短少ナル場合ニ当リテ裁
判官或ハ最終ニ競リ直段ヲ附ケタル者ニ私
シタルニハ非カレカト云ヘル疑ヲ受クルノ
恐レアリ○是故ニ法律ハ最終ニ競リ直段ヲ
附ケタル時ト其糶賣ノ決定シタル旨ヲ云渡
ス時トノ間ニ於テ適當ニシテ且ツ充分ナル
時間ヲ規定セサル可カラサルナリ
或ハ何分時ヲ以テ其時間ヲ定ムルヲ得ル
ナラント虽凡此ノ如クスル時ハ必ス稍々大

ナル時計ヲ備ヘ付ケ以テ裁判官モ公衆モ共
ニ其何分時タルヲ明認スルニ便ナラシメ
サル可カラス○果シテ然ラバ地方ニ因リテ
ハ或ハ實際ニ於テ多少ノ困難ヲ究ムル所モ
少ナカラサル可シ且ツ仮令ニ實際ノ不都合
アラサルモ徒ラニ損益相償ハサル費用ヲ為
スニ至ラン○故ニ法律ハ佛蘭西及ニ其他ノ
諸国ニ於テ既ニ慣用セル至極簡便ナル方法
ヲ採レリ○略ホ一分時間燃へ続クヲ得可
キ諸多ノ蠟燭ヲ漸次ニ點ス常ニ之ヲ火ト
稱ス而シテ其裁判所ノ机上ニ之ヲ置キ以テ
公衆ノ面前ニ供フ○糶賣ヲ始ムルヤ直ニ其
蠟燭ノ一ヲ點シ其滅スルニ從テ更ニ他ノ蠟

燭ヲ點スノ絶ヘス次第ニ競リ上ケ直段ヲ附
ケル者ナル時間中ハ別段其點シタル蠟燭ノ
數ヲ算スルニ及バズ去レトモ競リ上ケ直段
ヲ附ケル者次第ニ減シテ殆ント止マントス
ルノ模様ニ至シハ其事ヲ擔當スト更負公ケ
ニ第一ノ火ヲ點シ如ク者ヲ告リ第一ノ火滅
スルヲ待テ更ニ第二ノ火ヲ點ス而シテ始メ
ノ如ク公ケニ其旨ヲ告ク第二ノ火滅スルモ
尚ホ新タニ競リ上ケル者ヲ得サル時ハ更ニ
第三ノ火ヲ點シ以テ等シク其旨ヲ告ク○第
二ノ火及ヒ第三ノ火カ滅セサル時間中ハ右
ノ更負取回トナク將ニ其火ノ滅セントスル
旨ヲ呼ヒ且ツ糶賣ノ買受人タラントテ欲ス

ル者ハ最早ヤ躊躇ス可カラサル旨ヲ告ク○
實際ニ付テ之ヲ觀ルニ適々最終ノ際ニ當リ
テ更ニ競リ上ケ直段ヲ附ケル者現ハレル
屢々之レアリ此ノ如キ場合ニ於テハ更ニ三
個ノ火ヲ點シ終ハリタル後ニ非サレバ決シ
テ其糶賣ヲ止ムルヲ得ズ但シ此ノ場合ニ
於テハ其新ノ競リ上ケ直段ヲ附ケタル時ニ
點シ置キタル蠟燭ヲ以テ第一ノ火トゆス可
シ
第三ノ火滅スルニ至ル迄竟ニ新ニ競リ上ケ
直段ヲ附ケル者ヲ得サル時ハ直ニ其糶賣ヲ
閉止ス而シテ其最終ノ競リ直段ヲ附ケタル
者ヲ以テ買受人ナル旨ヲ云渡ス○是レ

即チ其裁判官ノ任ナリ

第百二十一条の漸次ニ蠟燭三箇ノ尽キタル後
豫メ定メアル附ケ直段ヨリ更ニ高キ價ヲ附ク
ル者アラサル時ハ関係人ノ中一人又ハ数人ノ
申メニ因リ裁判所ハ直ニ関延ノ終ニテ其附ケ
直段ヲ下減スルニ付キ更ニ糶賣ヲ行サシム
ルヲ得可シ
右減價ヲ為スルハ最初ノ附ケ直段十分ノ一ヲ
超過ス可カラズ
又漸次、三個ノ火尽キタル後尚ホ更ハ承諾ヲ
為ス者アラサル時ハ裁判所ハ新タニ関係人ノ
請求アルヲ待ツテ附ケ直段ヲ更ニ十分一丈減
少スルヲ得可シ

糶賣ニテ價ヲ付ケル者アラサル時ハ原告人又
ハ差押ヲ受ケタル者ノ求メニ因リ後ニ定ムル
期日ニ至ル迄其糶賣ヲ延ハス可シ
又関係人ノ中其附ケ直段ヲ下減スル者ニ別
統テ関延アル可キ者ヲ求ムル者一人モ在ラサ
ル時差クハ此求メラメシタル場合ト虽モ裁判
所ニテ後日ニ延ハスヲ以テ賣払ノ為メニ都合
宜シト考定シタル時ハ亦右同様ナリトス
前段ニモ既述ヘタルカ如ク若シ最初ノ附
ケ直段ハ高キ等シキ提供アラサル時即チ此
附ケ直段ニテ買入レニテ承諾スル者アラ
サル時ハ終ニ其糶賣ヲ行フニ至ラスの仏蘭
西法律ノ規定スル所ニ依レバ競り直段ヲ附

ケル者一人モアラサル時ハ其差押人ヲレテ
最初定メ置キタル附ケ直段ノ高ニテ買受人
タラシム可シト云ヘリ(第七百六条)此法律草
條ニ於テハ敢テ仏蘭西法律ニ定メアル方法
ヲ採ラサルナリ蓋シ此方法ハ實ニ失当ナリ
モノナラハ故ナリ此方法ハ先ツ權利者一般
ノ利益ニ反シ保セテ其差押ヲ受ケタル者ノ
利益ヲ損スルノ弊アリ仮シ之ヲ允許スル時
ハ差押人ハ常ニ低價ニ其附ケ直段ノ高ヲ定
ムルナラン又此方法ハ元來法律上一般ノ原
則ニ背馳スル所アリ如何トナレバ差押人ヲ
シテ仮令ヒ自ラ好マザル物件ナルカ又ハ自
ラ代金ノ辨済ヲ為レ能ハサル物件ナリト云

此必ス之ヲ獲得セシムルニ至ンヲ以テ元來
差押ノ權ヲ正當ニ執行スルコトヲ妨碍スルコ
有ルヘキカ故ナリ

加之終ニ自ラ買受人トナレル差押人カ到底
其不動産ノ代金ヲ新済スルコト能ハサルカ否
メニ彼ノ通常ノ糶賣買受人ガ自ラ代金ヲ払
フコト能ハサル場合ノ如クニ枉愚ナシ糶賣ニ
付キ更ニ右ノ不動産ヲ賣払ハントスル時ハ
必ス其差押人ノ為メニ大ナル損失マシトテ
免カレサル可シ

此法律草條ニ設テアル方法ニ因レバ最初ノ
附ケ直段ヲ差諾スル者アラサル時ハ余リ高
キニ過キル價ニ其附ケ直段ヲ定メタルモノ

トセリ故ニ更ニ其直段ノ高ヲ下減スルコトヲ
許ルセリ。法律ハ裁判官ヲシテ其訟廷ニ於
テ右附ケ直段ノ高ヲ更ニ減少セシムルコトヲ
允許セリ。但シ裁判官之ヲめスニハ必ス左ノ
ニ要件ニ依ラサル可ク。第一其關係
人ノ中一人之ヲ要ホスルコトヲ要ス。故ニ裁判
官ノ特權ヲ以テ之ヲめスルコトヲ得ズ。第二最初
ニ定メタル代金ノ高十分一以上ニ下リテ其
直段ヲ減マシテ許ルサズ。例ヘバ千円ノ
直段ヨリ九百円ノ高ニ下リ九百円ヨリ八百
十円ニ下ルカ如キ是ナリ。其他皆之ニ准ス。
若シ一度ヒ附ケ直段ノ高ヲ下ケタルモ尚ホ
之ヲ承諾スルモノアラサル時ハ裁判所ニテ

ハ右ニ同シク二個ノ条件ニ循テ更ニ其十分
一ノ減價ヲ為スルコトヲ得可シ。但シ此減價ノ高
モ亦等シク最初ノ附ケ直段ノ割合ニ准シテ
之ヲ兼計スルモノトス。
右ノ如クシテ次第ニ其直段ヲ減スルモ尚ホ
買受人タラント欲スル者ヲ得サルニ於テハ
最早ヤ別段時日ヲ定メシテ糶賣ノ延期ヲ
為ス。
又最初ノ附ケ直段ニテ承諾スル者アラサル
時ニ當リテ其關係人ノ中何入タリトモ更ニ
附ケ直段ヲ下減セシメテ要ムル者アラサル
ニ於テハ亦右同様糶賣ノ延期ヲ為ス可シ。
又後令ニ最初ノ直段又ハ二度目ニ定メタル

直段ヲ更メ減少セシムルヲ要スル者アリト虽
モ裁判官ニ於テ其事實ノ模様ヲ察シ買受人
ノ多少ヲ量リ以テ充分満足ス可キ結果ニ至
ルヲ能ハズト思考スル時ハ自ラ其要求ヲ拒
否スルヲ得可シ
何レノ場合タリト虽モ裁判官ハ必ス其関係
人ノ意見ヲ聴キ以テ之ヲ取捨スルノ権アル
可シ

第百二十二条○前条ノ終リニ項ニ定メアル規
則ニ循ヒ糶賣ヲ停止シタル時ハ原告入差押ヲ
受ケタル者又ハ其他既ニ記入ヲ爲シタル者入
質ノ権利者ハ總テ附テ直段ヲ下減シタル上更
メテ糶賣ヲ始メシムルヲ記シタル請求者ヲ裁判

所ニ差出スルヲ得可シ

箇條各モ亦第百七條ニ定メタル法式ノ通りニ
之ヲ更ムルヲ得

新ニ公示ヲ爲ス期限ニ関シテハ第百十二条ノ
規則ヲ守ル可シ

本条ニハ附テ直段ノ高ク減シタル上ニテ箇
条各ヲ更新シ且ツ新タニ公示ヲ爲シテ更ニ
糶賣ヲ始ムル手續ヲ規定セリ

第百二十三条○更ニ糶賣ヲ始メタル時漸次ニ
三個ノ火尽キタル後新ノ附テ直段ヨリ更ニ高
キ價ヲ附ケル者アラサルニ於テハ裁判所ハ関
係人ノ請求ヲ受ケタル上ニテ其直段ノ高ク二
十分一丈低減ス可シ

附ケ直段ノ高ヲ低減セサル可カラス是レ裁判所ノ必ス行ハサル可カラサル職分ナリ故ニ裁判所ニテハ最早ヤ最初ニ訟廷ヲ開始シタル場合ノ如ク已レノ職權ヲ以テ其糶賣ノ期日ヲ引延スルヲ得ズ

附ケ直段ノ高ヲ次第ニ低減シタル後漸ク一ノ買受人タル者ヲ得ルト虽モ必ス三個ノ火減シタル以上ニ非サレバ自ラ其糶賣ノ買受人タル可キ云渡ヲ受ケルヲ能ハサル可シ但シ其者提供ヲ為シタル時ニ照シテ其タル火モ亦合セテ右三個ノ一ニ之ヲ養入ス可シ
第百二十四条〇何レノ場合ニ於テモ最終ニ競リ直段ヲ附ケタル者ハ速カニ其直段ノ高十分

一ヲ昏記ノ手ニ渡ス可シ
此特例中ハ假リニ公廳ヲ停止ス而シテ裁判官ハ更ニ処分ヲ始ムルヲ有ル可キ旨ヲ訟廷ノ公衆ニ報ス可キ

佛蘭西ニ於テハ買受人タルラント欲スル者自ラ糶賣ノ競リ直段ヲ附ケルヲ許ルサズ必ス代訴人ノ介入ヲ經テ之ヲ為ス可シト云ヘル法則ナリ(第七百五条)是レ蓋シ買受人タルラント欲スル者ハ成ル可ク鄭重ニ事ヲ為サシ一ヲ計リ且ツ專ラ妄リニ競リ上ケ直段ヲ附ケル者ヲ防止セニ力ヲナリ若シ此ノ如クセサル時ハ自ラ買受人タルラント欲スル意アルニ非ズ又買受人トナル可キ方法アルニ

非ガシテ徒ラニ差押人ノ利益ヲ圖ラシカ為
ノニ漫リ、其代金ノ高ヲ競リ上ケル者モア
リニ又差押ヲ受ケタル者ノ利益ヲ計ラシカ
為ノニ等シク其代金ヲ過當ニ競リエケル者
モアラシニ代訴人ハ總テ已レノ行フ事柄ニ
関シテ一般ノ責任アルモノナルカ故ニ徒ラ
ニ此ノ如キ欺計ヲ為スノ憂ヘアラサルナリ
且ツ常ニ着実ナル者ノ為メニ非ヤレバ敢テ
其競リ直段ヲ附ケサル可シニ代訴人若シ其
者、付テ疑念スル所アル時ハ之ニ向テ豫メ
相当ノ擔保ヲ差出サシムルナリ
日卒ニ於テハ未タ代訴人ノ設ケアラサルナ
リ且ツ前段ニモ既に述ヘタルカ如ク敢テ新

クニ之ヲ設ケルコトヲ好マズ將タ今日直ニ代
訴人ノ職ヲ設ケントスルハ決シテ其當ヲ得
タルモノニ非ス
尤レハ惡意アル者又ハ無資力ナル者カ漫リ
ニ競リ直段ヲ附ケルノ恐レアルカ故ニ必ス
其危険ヲ防禦スル為メノ方法ヲ規定セサル
可カラサルナリ
是レ即チ最終ニ競リ直段ヲ附ケタル者自ラ
其釋賣ノ買受人ヲラントスルニハ必ス先ツ
已レノ附ケタル代金ノ高十分一ヲ登記ノ手
ニ渡ス可シト云ヘル法則アル所以ナリ
此処分ヲ施ス時間中ハ多少ノ間必ス其証文
ノ停止ヲ為サ、ル可カラス就テハ買受人ヲ

ラント欲スル者等ハ皆直ニ其場所ヲ退散ス
ルノ掛念アルヲ以テ裁判官ハ殊更ニ未夕其
処置ノ終結セサル旨ヲ報スルナリ
昏記ハ常ニ善計ニ熟練セル者ヲ隨ヘ以テ成
ル可ク速カニ右ノ金高ヲ差出サシムルカ又
ハ成ル可ク速カニ到底之ヲ差出スル能ハサ
ル者ナルカヲ承認セサル可カラス否ヲサレ
バ或ハ其折角ニ集合シタル公衆ノ退散スル
ニ至ル恐レアリ

第百二十五条〇現場ニ在ル原告人又ハ其適當
ノ代理人ヨリ其競り直段ヲ附ケタル者ヲ以テ
資カアル者ト為シテ之ヲ承諾ス可キ旨ヲ直ニ
申述シタル時又ハ此擔保ノ中全部若クハ一部

ヲ免ルル可キ旨ヲ直ニ申述シタル時ハ右ノ競
り直段ヲ附ケタル者ハ其價十分ノ一ヲ差出ス
ニ及ハサル者トス
若シ原告人自ラ其競り直段ヲ附ケタル時ハ同
一ノ方法ニ因リ差押ヲ受ケタル者自ラ右ノ申
述ヲ為スルヲ要ス
政府及ヒ府縣ハ其納金スルヲ当然免ルサレ
ル者トス

或ル場合ニ於テハ豫メ期シタル高ヨリ以外
ノ額ニ競り直段ヲ上ケタルカ為ニ最終ノ
直段ヲ附ケル者カ其十分一ノ高ヲ差出ス
カノニ充ツ可キ充分ノ金額ヲ所持セサル
モアレン〇此ノ如キ場合ニ於テ若シ其關係

人ノ中最モ重要ナルモノト看做ス可キ原告
人ガ自ラ其高ノ中全部又ハ一部ヲ差出人ニ
及ハサル許可ヲ與ヘタル時ハ最早ヤ其糶賣
ノ決定シタル者^指ヲ云渡ス^付キ少シモ差支
ヘアラサルナリ但シ右ノ許可ヲ為シタル者^指
ハ必ス之ヲ其調局ニ附記スルヲ要ス
又或ル最終ニ競リ直段ヲ附ケタル者ハ即チ其
原告タルヲモアラシ是レ亦法律上ニ規定スル
一要点ナリ此場合ニ於テハ其十分一ノ高ヲ
差出スニ及ハサル許可ヲ與フルノ權ハ差押ヲ
受ケクル者自ラ之ヲ有スルモノトセリ
政府及ヒ諸府縣ハ皆常ニ資カアルモノナリ
ト云ヘル推測アリ○法律ハ郡區ヲ合セテ之

ニ加ヘバト雖モ郡區ハ大概其金高ヲ豫メ差
出スニ及ハサル許可ヲ受^ルルナラニ

第百二十六条○右ノ如ク納金ヲ免セラレタル
場合ノ外ニ於テ最終ニ競リ直段ヲ附ケタル者
カ直ニ其定メアル納金ヲ為サ^ル時ハ更ニ開
廷ヲ為シ以テ最終ノ附ケ直段ニテ新タニ糶賣
ヲ開ク可シ但シ最前ノ競リ直段ヲ附ケタル者
ハ之ニ加ハル^トヲ得ズ
何レノ場合ト雖モ差押ヲ受ケタル者ハ決シテ
自ラ買受人トナル^トヲ得ス

若シ前段ニ示シタルカ如ク金高ヲ差出スニ
及ハサル免許ヲ受^ル可^クラサル者^ハ最終ノ
競リ直段ヲ附ケタル上ニ^テ直ニ其金高ヲ差

出ス可能ハサルニ於テハ敢テ其者ノ利益ノ
為メニ糶賣ノ決定シタル言渡ヲ為ス可カラ
ズ更ニ其訟廷ヲ開始ス可キナリ
此場合ニ於テハ最終ノ競リ直段ヲ附ケタルカ
為メニ其前ノ競リ直段ヲ附ケタル者等ハ自
ラ提供シタル代金ニ付キ既ニ悉ク其義務ヲ
免カレタル可キカ故ニ最終ニ定メタル附ケ
直段ニ基キテ其糶賣ヲ為ス可キナリ
但シ前ノ買受人ハ最早ヤ其中ニ加ハル
ヲ得サル可シ是レ蓋シ当然ノ事ナリ
如何ナル場合タルヲ問ハズ差押ヲ受ケタル
者ハ自ラ其糶賣ノ買受人タルヲ許シサズ
○是レ敢テ差押ヲ受ケタル者ガ尚ホ其不動

産ノ所有者ナルカ為メニ非ヌ又已レニ属ス
ル物件ハ自ラ之ヲ買取ルヲ能ハバト云ヘル
理申フルニ因テ然ルニ非ヌ如何トナレバ差
押ヲ受ケタル者ハ自ラ糶賣ノ効ニ因リ竟ニ
其財産ノ所有権ヲ失スルニ至ラントテ豫期
シテ之ヲ買取ルヲ得可キカ故ナリ○若シ
差押ヲ受ケタル者自ラ其不動産ヲ買受ケル
夫レノ資カフルニ於テハ隨意ニ其負債ノ高
ク償却スルヲ得可キナリ否ラサレバ其者
ニ惡意ナル証拠アリ是レ之ニ買受人タル
ヲ允許セザル真正ノ理由ナリ
(第百二十七条)○若シ最終ノ競リ直段ヲ附ケタル者ガ
十分ノ納金ヲ為スヲ又ハ第百二十五条ノ規則ニ

因り納金ヲ免ルガレタル者ナル時ハ直ニ其者ノ
為メ、糶賣ノ言渡ヲ為ス可シ但シ其者若シ後ニ至
リテ箇条各ニ定メアル条件ヲ執行セサル時ハ之ヲ
狂愚ナル競、直段附ケ人(直取ナリト看做ス可シ而
シテ其不動産ハ更ニ之ヲ糶賣ニ掛ケ以テ第百二
十二条、規定アルカ如クニ附ケ直段ヲ下減スルニ
付キ生スル損失ノ責ヲ右ノ狂愚ナル競リ直段附ケ人
ニ擔当セシム可シ

若シ新メニ行フ糶賣ノ代價カ最初ニ行フナル糶賣
ノ代價ニ等シカラサルカ又ハ之ヲ超過セサル時ハ狂愚
ナル競リ直段附ケ人自ラ其價ノ差ヲ充ル為メノ金
高ラ差出ス可キ義務アリトス而シテ此場合ニ於テハ
先ツ選テ其十分一ノ納金ヲ以テ之、充ツ可シ

或ル場合ニ於テハ糶賣ノ買受人最終ノ法式
ヲ履行シタル後其糶賣代金ノ中残額ヲ納メ
サル一モアラシ又箇条各ニ記載アル諸事ノ
条件ヲ守ラサル一モアラシ此ノ如キ者ヲ
通称シテ狂愚ナル競、直段附ケ人ト云フ法
律ハ明カニ条文中ニ此語ヲ存シ置ケリ
斯ル場合ニ於テハ附ケ直段ヲ低減シタル高
ニ付テ更ニ其不動産ノ競リ直段ヲ附ケシム
可シ但シ第百二十二条ニ規定アル要件ト期
限トヲ守ラサル可カラズ佛蘭西ニ於テハ此
方法ヲ称シテ狂愚ナル競、直段ニ関スル再
賣ト云フ

法文ニハ稍々判然ト狂愚ナル糶賣買受人ノ

差押ノ事ヲ登記シタル端傍ニ更ニ其糶賣ノ
事ヲ附記スルヲ要スルハ蓋シ他人ヲシテ
新ノ所有者ヲ認知セシメシカ为メナリ○是
レ不動産ノ移轉ヲ公示ス可キ方法ヲ遍施ス
ル場合ノ一例ナリ

第百二十九条ノ糶賣ノ裁判言度ハ第、
ノ規則ヲ犯シタルニ因リ大審院ニ上告スル
非サレハ之ヲ攻撃スルヲ得ス
上告ハ其裁判ヲ言度シタル日ヨリ十五日以内
ニ非サレハ之ヲ受理セサル者トス
原告人差押ヲ受ケタル者、不動産ニ付キ記入ヲ
为レタル権利者及ヒ解除、回復、又ハ廢棄ノ權ヲ
申立ントシテ第百十七条ノ規則ニ因リ之ヲ失

シタル者、ニ：：限り右、上告ヲ为スノ權アリ
トス

糶賣ノ裁判云渡ニ付テハ敢テ之ヲ控訴スル
トテ許山サズト云フモ亦等シク其裁判云渡
ニハ嘗テ争訟ヲ決定スルノ性質アラサルカ
为メナリ○但シ法律ノ制規ハ必ス常ニ之ヲ
遵奉セサル可カラサルカ故ニ大審院ニ上告
ヲ为スルハ必ス之ヲ允許セサル可カラス○
法律ハ其上告ヲ为スルヲ得可キ權アル者ヲ
記定セリ且ツ爰ニ法律ガ第百十七条ノ規則
ニ因リ既ニ訴權ヲ失シタル者ニ右ノ權利ヲ
允許スルハ敢テ不当ニ其訴權アラサル者ヲ
云渡サレタルモノナリト推定セルカ为メニ

非ズ此等ノ者ハ一旦真ニ其權利ヲ失シタル
モ尚ホ其失シタル訴權ヲ回復スル爲メニ更
ニ差押ノ無効ナルトヲ申立ルニ付キ多少ノ
利益アルトアラシ

上告ヲ允許スル場合即チ其糶賣ヲシテ廢棄
ニ帰セシム可キ場合ハ別ノ諸箇条ニ之ヲ規
定セリ○佛蘭西法律ニ因レハ其廢棄ニ帰セ
シムル場合甚ダ少ナカラズ或ハ余リ多キニ
過クルモセノナラシカ(第七百十五條參觀)

第百三十條○不動産ノ糶賣ニ因リ得タル金額
ハ之ヲ納メタル時ヨリ四十八時間内ニ昏記之
ヲ附託庫ニ差出ス可シ但シ其金高ノ如何ニテ
問ハス又其不動産ニ付キ記入ヲ爲シタル權利

者アルト否トニ拘ハラザルナリ

然レモ昏記ハ自ラ前拂ヲ爲シタル費用又ハ原
告人ノ前拂シタル費用ニシテ正當ノ式ニ從ヒ
假リニ相當ノ高ニ評定シタルモノヲ裁判官ノ
許可ヲ得タル上ニテ自ラ引去ルトテ得可シ但
シ後ニ至リ其不足ノ外ヲ補ヒ又ハ其過分ノ高
ヲ減スルハ此限リニ在ラス

不動産ノ差押ニ関シテハ昏記ヲシテ其賣拂ニ
因リ得ル所ノ金高ヲ附託役署ニ差出サシム
ル義務ニ付テ法律上幾分カ緩ナル所アリ○
不動産差押ノ場合ニ於テ昏記嚴ニ右ノ義務ヲ
履行ス可キハ差押人數名アルカ故障ノ申立
人アルカ又ハ一千円以上ノ金高ヲ超過セル

場合ニ限ルモノトセリ
之ニ反シテ不動産ノ差押ニ関シテハ常ニ関
係アル権利者数人ヲ有サル場合ハ實際稀有
ノ事ナル可キカ故、法律ハ別段其差押入夕
ト故障ノ申立人タルト昏入算又ハ特権ノ
記入ヲ為シタル者タルトヨ區別スルヲナク
又其金高ノ多少ヲ區別スルヲナク河シノ場
合ニ於テモ必ズ其金高ノ附託ヲ為ス可シト
定メタリ

第八章

権利者間ノ順序及ヒ権利者ノ間
ニ配当スル事訴訟法第六百五十
六条乃至第六百七十三条〇第七
百四十九条乃至第七百七十九条

第三百一一条〇差押ヲ為シタル上糶賣ヲ行フ
クル不動産ニ付キ特権又ハ昏入算ノ權ヲ記入
シタル権利者アル時ハ原告人又ハ関係人ノ中
一人最モ注意ナル者ノ請求ニ因リ裁判所ノ昏
記列ヲ録申シテ理事裁判官ノ手ニ其證昏ヲ差
出ス可キ旨ヲ命セラル可シ但シ之ガ為メニハ
必ズシモ其賣拂ニ因リ得タル金高ニ付キ故障
ノ申立ヲ為スヲ要セサルナリ
不動産ニ付テ有スル昏入算ノ權又ハ特権ヲ

記入セシ権利者ハ必ス其記入ヲ以テ不動産
所在ノ土地ニ在ル裁判所ノ管轄内ニ特別ナ
ル一ノ住居ヲ選定セサル可カラス。九レハ
関係人ノ中一人若シ急ニ其差押カ算計ヲ行
フニ付テ利益アル時ハ其者ヨリ右等ノ権利
者ヲシテ各自ノ証骨ヲ差出サシムルニ容易
ナル可シ而シテ右等ノ権利者ヨリ其金高ノ
分派ニ付テ故障ノ申立ヲ為スニ至ル迄之ヲ
俟ツヲ要セサル可シ蓋シ記入ハ常ニ故障
ノ申立ニ適スルト云フヲ得可キカ故ナリ
第百三十二条。他ノ権利者ハ自ラ故障ノ申立
ヲ為シ以テ自ラ眞実ノモノナル旨ヲ各面ニ記
シテ證明スル證骨ヲ差出シタル以上ニ非サレ

ハ順序及ヒ配当ノ中ニ加入スルヲ許ルサ、
ル者トス

次ニ法律ハ其権利ノ記入ヲ為サハル権利者
ノ事ヲ記載セリ。通常ノ権利者ハ即チ其中
ノ一ナリ此通常ノ権利者ニ付テハ敢テ順序
即チ階級ヲ定ムルヲ得ラス。此類ノ権利者ハ
唯其分派ニ預ルノ權テルノミニ過キサルナ
リ。又特權若クハ各入質ノ權ヲ有スル權利
者ニシテ其權利ヲ記入セサル者アリ此等ノ
權利者ハ自ラ其順序ノ中ニ加ハルヲ得可
シ語ヲ更ヘテ之ヲ陳コレハ此等ノ權利者ハ
其先取權ノ等級ニ從テ自ラ義務ノ辨濟ヲ受
クルヲ得可シ。先ツ動産ニ付テ特權ヲ有

シ傍テ不動産ニ付テ特権ヲ有スル権利者ノ
如キハ即チ其一例ナリ。此等ノ権利者カ其
不動産ニ付テ有スル権利ハ常ニ其不動産ノ
ニテ尚ホ不充カナル場合ニ非サレハ起ラサ
ル可キナリ故ニ及今ト其不動産ニ付テ記入
スルト有リト虽モ屢々徒勞ニ属スルヲ
シテ其ノ徒費ヲ尽スニ至ルヲアラシ
佛蘭西法典(第二百七条)ハ右等ノ特権ハ嘗
テ之ヲ記入ナルニ失ハサルモノトセリ後日
日本ノ民法ニ規定スル所モ亦必ス之ニ異ナ
ラサル可シ而シテ其理由モ亦必ス右ニ述ヘ
タルモノニ相異ナル所ナカル可シ
且ツ此種ノ債主権ニハ常ニ余リ重要ナル高

ニ上ルモノアラズ又此等ノ債主権ハ概シテ
其後ノ等級ヲ与ヘル権利ヲ有スル権利者ヨ
リ之ヲ認知スルヲ得可キ性質アルモノ多
シトス
又日本ニ於テモ佛蘭西ニ於ケルカ如ク多分
別段ノ記入ヲ為スニ及ハサルニ三ノ昏入質
権ヲ允許カラルラン例ハ知者又ハ治産ノ
禁ヲ受ケタル者カ其後見人ノ財産ニ付テ有
スル昏入質権、如キ又結婚中ノ婦人カ其夫
ノ財産ニ付テ有スル昏入質権、如キ是ナリ
此等諸事ノ場合ニ於テハ其権利者、有スル
権利ノ高ヲ別段法律工ニテ認定スルニ非カ
ルナリ故ニ本条ニモ明カニ記載セルカ如ク

必ス各記局ニ故障ノ申立ヲ為シ以テ其証局
ヲ差出シ且ツ其真正ナル旨ヲ確認スルヲ要
用ナリトカ

第百三十三条 右ノ故障申立ハ各記自己ノ職
権ヲ以テ其地方ニ在ル一ノ新聞紙ニ廣告ヲナ
シタル日ヨリ一ヶ月ノ間ニ之ヲナス可シ此廣
告ニハ差押ヲ受ケタル義務者ノ姓名原告人ノ
姓名外派スヘキ金高及ヒ其他右ノ附記ヲ為ス。
ニ付キ守ル可キ期限ノ事ヲ記載スルヲ要ス
右故障申立ノ為メニハ其関係人ヲシテ認知
セシムル為メニ行フ公示ヲナシタル後稍々
充カナル期限ヲ定ムルヲ必要ナリ本条ノ主
眼ハ即チ之カ期限ヲ定ムルニ在リ

第百三十四条 若シ動産ノ差押ニ因リ得タル
金高ヲ配当ス可キ場合ニ於テハ賣却ヲ為ス時
ニ至ル迄ノ時間中ニ非サレバ其故障ノ申立ヲ
受理ス可カラズ又若シ制止差押ナル時ハ其差
押ノ有効ナル一ニ付キ且ツ他人ナル差押人ノ
負債カ現ニ存在スル一ニ付キ決定ヲ為スニ至
ル迄ノ時間中ニ非サレバ其故障ノ申立ヲ受理
ス可カラズ

夫レ動産ノ差押ニ因リ又ハ制止差押ニ因リ
得ル所ノ金高ヲ配当スル一ヲ際限ナク遅延
セシムルハ敢テ法律ニ許ルス可キ事ニ非サ
ルナリ○大概其配当ス可キ金高ハ左程多額
ニ非サル可キカ故ニ別段其故障ノ申立ヲ為

スニ要用ナル特別ノ期限ヲ定ムルニハ及ハ
サル可レ且ツ仮シ此期限ヲ定ムルヲ要ス
ルトセハ必ス亦其起算ノ点ヲ示ス為メニ殊
更ニ公示ヲ為サ、ル可カラズ果シテ然ラバ
益々入費ノ高ヲ増加スルノ弊ナキヲ免カレ
ズ

但レ動産ノ賣却ヲ為スニ至ル迄ハ其故障ノ
申立ヲ允許スルモノトス又制止差押ノ場合
ニ於テハ才七十六條乃至才八十三條ノ規則
ニ循ヒ然テノ訴訟手續ヲ終結スルニ至ル迄
等シク其故障ノ申立ヲ允許スルモノトセリ
又制止差押ノ場合ニ於テ其差押ヲ受ケタル
他人カ自ラ保持セル動産物ヲ賣却フヲ要

スル時ハ此賣却ヲ為スニ至ル迄其故障ノ申
立ヲ為スヲ得可シ

第百三十五條 差押ヲ受ケタル者原告人又ハ
其土地ニ住スル他ノ者ニシテ真正ノ権利者カ
遠行中ナルカ病中ナルカ若クハ正当ニ證明セ
ラレタル他ノ理由アルニ因リ故障ノ申立ヲ為
スヲ能ハサルヲ認知スル時ハ右ノ期限内ニ
其権利者ノ名義ヲ以テ自ラ故障ノ申立ヲ為ス
ヲ先許セラル可シ

此債主権ハ假リニ記入ヲ為シ以テ相当ノ高ナ
リト申述シタル金額ヲ指示スルヲ要ス
本条ノ法則ハ衡平ノ道ニ基キテ起ル所ノモ
ノナリ其主眼トスル所ハ差支ヘアル権利者

ノ有スル故障申立ノ権利ヲ保維シテ之ヲ失
ハサラシムルニ在リ蓋シ権利者ノ中一人偶
々差支ヘアリテ自ラ故障ノ申立ヲ為スル能
ハサル位置ニ在ルカ为メニ他ノ権利者々圖
ラズ其利益ニ于カルヲ得ルトスルハ敢テ
其当ヲ得タルノ處置ニアラサル可キカ故ナ
リ

第百三十六條 義務者原告人及ヒ故障ヲ申立
タル權利者ハ以上ニ定メタル期限ヲ經過シタ
ル日ヨリ十五日間内ニ其差出サレタル証書申
述書并ニ假リノ評價書ヲ互ニ交付スルヲ得
可ク又異議ヲ述ヘルヲ得ヘシ
故障ノ申立ヲ為ス者アル時ハ必ス其之ヲ為

シタル者ノ相互ノ証書ヲ調査セサル可カラ
ス
動産ノ差押又ハ制止差押ニ関スル場合ニ於
テハ別段十五日間ノ期限ヲ短縮セサルナリ
如何トナレバ右二個ノ場合ニ於テハ其証書
ノ調査ヲ為スニ付キ真ニ困難ヲ究ムルヲ有
ル可キカ故ナリ

第百三十七條 執行力ヲ有セル証書ニ関スル
爭論ハ總テ其差押ヲ管轄スル裁判所ニ之ヲ差
出ス可ク且ソ急速事件トシテ之ヲ處理スルヲ
要ス
執行力ヲ有セサル証書ニ関スル爭論ハ總テ普
通法ノ規則ニ循ヒ相当ノ管轄裁判所ニ之ヲ差

出ス可シ但シ法律ニ定メアルカ如クニ其控訴ヲ為ストテ許ルヌ可シ

然レモ若シ右ノ争論アルニ因リ其處分ヲ施ス為メニ余リ長キ期限ヲ要スルニ於テハ裁判所ニテハ假リニ其争論ニ係ル債主権ヲ認許スルカ又ハ假リニ之ヲ除去スルトテ得可シ

爰ニハ通常ノ管轄規則ニ一ノ例外アリ差押ノ處分ヲ行フ所ノ裁判所ハ必スシモ其被告ノ住居スル土地ノ裁判所ニ限ラサルナリ
○但シ此例外ノ規則ハ特リ其執行力ヲ有スル証書アル場合ノミニ適施ス可キモノナリ
蓋シ此場合ニ於テハ其争論アルカ為メニ余リ甚タシク其配当ヲ遅延セシム可カラザル

カ故ナリ

若シ之ニ反シテ其執行力ヲ有スル証書ノアラサル時ハ必ス通常ノ管轄規則ニ依遵セザル可カラズ蓋シ義務者ハ其差押ニ付テ傍ラ争論ヲ起リタルカ為メニ漫リニ損害ヲ蒙ルニ至ル可キ理アラサル可キカ故ナリ
此場合ニ於テ法律ノ意ヲ注ク所ハ即チ一面ニ向テハ余リ甚タシク其差押ノ手續ヲ遅延セサルトニ在リ又他ノ一面ニ向テハ其中立ヲ為シタル権利者ノ権利ヲ漫リニ失却セシメサルトニ在リ

第百三十八条 以上ニ定メアル期限内別ニ争論ヲクシテ之ヲ經過シタル後又ハ其争論ニ付

キ一旦決定ヲ為シタル後ハ理事裁判官（シユジ
ム）ニミツセルヨリ其特權アル權利者又ハ
各入質權アル權利者ノ間ニ順序ヲ定ムル為メ
配○暇リノ方法ヲ施ス可ク又通常權利者ノ間ニ
配○当ヲ行フ為メニ假リノ方法ヲ施ス可シ
凡ツ權利者等ノ順序ヲ定ムル為メ且ツ其間
ニ金高ヨ配当スル為メニ其裁判所ニテ管轄
スル諸事ノ訴訟事件ヲ多少妨ケテ為メニ其
處分ヲ彼レ是レ遲延セシムルニ至ルハ素ヨ
リ其当ヲ得タルモノニ非ズ故ニ常ニ多忙ナ
ル裁判所ニテハ或ル一人ノ裁判官ニ命シテ
右等特別ノ手續ヲ擔當セシムル一有り其裁
判官ハ一ケ年間引続テ其處分ノミヲ擔當ス

ル一モアラシ又ニケ年引続テ之ノミヲ擔當
スル一モアラシ

第百三十九条 期限アル債主権ハ民法ノ規則
ニ循ヒ總テ過期シタルモノト看做サル、可シ

章按第四百二十五条

停止ノ未必条件ニ関スル債主権ハ總テ此同一
ノ条件ニテ其中ニ加入セラル、モノトス
解除ノ未必条件ニ関スル債主権ノ為メニ拂フ
可キ金高ハ其返還ヲ為ス可キ場合ニ至リタル
時ハ為メニ物上又ハ對人ノ擔保ヲ差出シタル
以上ニ非サレバ其權利者自ラ之ヲ受取ル一ヲ
得ズ
成立スル一ノ正確ナルモ未タ算計ノ分明ナラ

サル債主権ニ付テハ其権利者ヨリ假リニ評價
ヲ為サシム可シ但シ裁判官ハ更ニ其高ヲ減少
スルヲ得可シ
停止ノ未必条件ニ関スル債主権又ハ假リノ處
分ニ属スル債主権ニ充ツ可キ金高ハ其終ニテ
附託庫ニ残シ置ク可シ
佛蘭西法典ノ如ク期限アル債主権若クハ未
必ツ条件アル債主権ノ位置ヲ等閑ニ附シテ
之ヲ規定セサルハ真ニ立法者ノ失策ナリ
期限アル義務ナル時ハ法令ニ法律上ノ期限
ニ関スル場合ト雖モ己レノ財産ヲ差押ヘラ
レタル義務者ハ民法ノ規則ニ循テ必ス其期
限ノ利益ヲ失ス可シ

停止ノ未必条件アル場合ニ於テハ其権利者
ハ等シク配当ヲ受ク可キモノ、中ニ参加ス
ルヲ得可シト雖モ未タ自ラ其金高ヲ受取
ルニ能ハサルナリ其金高ハ假リニ之ヲ附託
庫ニ預ケ置クモノトス
解除ノ未必条件ニ関スル場合ニ於テハ其權
利ハ直ニ發生シテ且ツ現ニ存在スルモノナ
リ去トモ其未必条件ノ成就スルニ至ルハ
其權利ハ全ク消滅ニ帰ス可キ故ニ權利者
ハ既ニ自ラ受取リタル金高ヲ更ニ返還スル
為メノ保証トシテ或ル保証人ヲ差出スカ又
ハ保証人ニ比適スル他ノ保証物ヲ差出シ以
テ正シク其者ヲ擔保スルヲ必要トスルナ

リ

第四百十條 特權又ハ書入質ノ權アル權利者ニシテ已ニ其記入ヲ為シタル者又ハ記入ヲ為スルヲ免ルサレタル者ハ民法ニ定メラル權ノ順序ニ循ヒ順次ニ加ヘラル可シ
他ノ權利者ハ分派ス可キ残余ノ全高ニ比較シテ其債主權ノ高ヲ割合ニ循ヒ其順序中ニ加ヘラル可シ

諸多ノ權利者間ニ存スル先取權ノ等級ヲ規定スルハ敢テ訴訟法ノ例ス可キ事ニ非サルナリ是レ全ク民法ニ記載ス可キ諸件ノ一ナリ

特權又ハ書入質權ヲ有セサル權利者ハ皆ナ

配当ス可キ残余ノ全高ヲ以テ各自ノ有スル債主權ノ高ニ准シテ其義務ノ弊濟ヲ受ク可キナリ

第四百十一條 右ノ如ク其順序中ニ加ヘラル權利者等ハ書記ノ書面ニ因リ八日間内ハ書記局ニテ其假リ規定ノ交付ヲ受ク可キ旨ヲ報知セラル可シ
右等ノ者ハ同上ノ期限内ニ自ラ姓名ヲ手署シタル書面ヲ以テ自己ノ意見ハ異議ヲ申立ルコトヲ得可シ

假リノ規定ハ即チ權利者等ヨリ為ス可キ申立ツ基本タリ此假リ規定ヲ為サ、ルニ於テハ其申立ヲ為スニ付キ要用ナル據ル可キ道

アラサルナリ

第四百二十二条 右八日、定期ヲ経過シタル後ニ至リ裁判官ハ其申立タル異議ニ付キ訟廷ニ於テ決定ヲ為ス可シ

異議ヲ申立タル権利者ハ皆其三日以前ニ呼出ヲ受テ可ク且ツ他ノ者ヲ交ヘスシテ吟味ヲ受テ可シ

裁判言渡ニ付テハ決ミテ上訴ヲ為スヲ許ルサス

第四百十三条 別段異議ヲ申立ル者アラサル時ハ理事裁判官自ラ其旨ヲ順序ヲ定メタル調書ニ記シ以テ其順序ヲ定ムルノ終結セシ旨ヲ明言ス可シ但シ未必ノ条件アル債主権又ハ

第四百三十七条及ヒ第四百三十九条ニ規定アル力如クニ假リニ先許セラレタル債主権ニ関スル所ハ右ノ限りニ在ラサルナリ

此ニク条ハ法文自ラ明瞭ナレハ別段評説スルニ及ハズ

第四百四十四条 右終ハリタル後書記ハ單純ニ先許セラレタル権利者ニ對シテ其附託庫ニアル金高ニ付キ辨濟ヲ受テ可キ命令書ヲ渡ス可シ

右権利者ハ書記ノ面前ニテ其命令書ニ自己ノ債主権ノ真定ナル旨ヲ記シテ已レ、姓名ヲ手署シタル申述書ヲ記載ス可シ

法律ハ無資力ナル義務者ニ對スル証書ニシ

テ屢々其訴訟手續ノ中ニ加ハ、ラカリシモ
ノヲ差出スニ付テハ通常ノ場合ニ於ケルヨ
リモ敷留ヲ行ノ一層容易ナリト思慮シタ
ルカ故ニ止レヲ得ズ其権利者ノ善意ト着実
トニ委シテ之ヲ決セン一ヲ圖レリ
法律ノ詐偽ノ申述ヲ為ス者ノ為メニ嘗テ其
刑ヲ定メズ如何トナレハ法律ノ敢テ其申述
ヲ為スニ付キ豫メ宣誓ヲ為ス可キ旨ヲ要セ
サルカ故ナリ

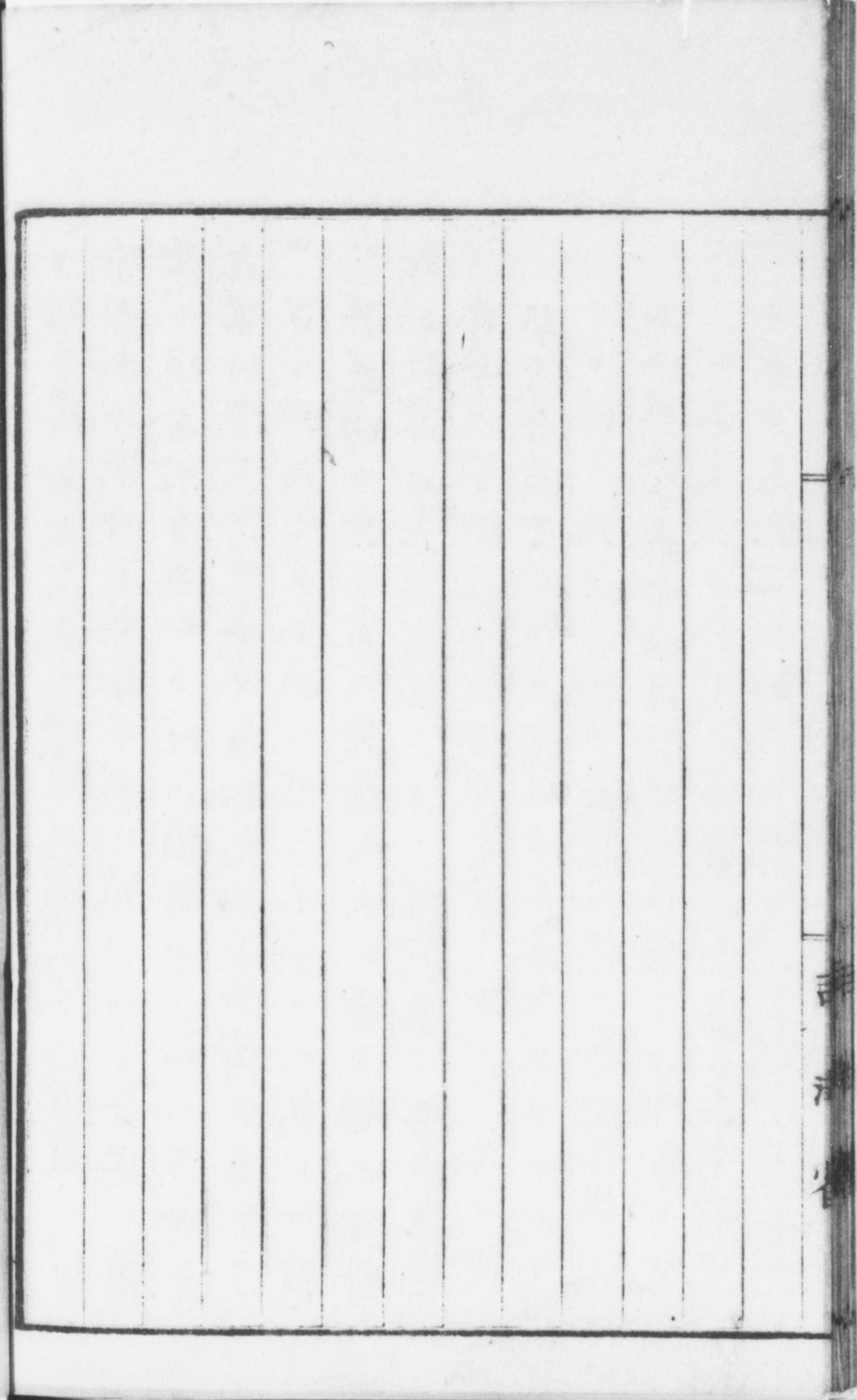
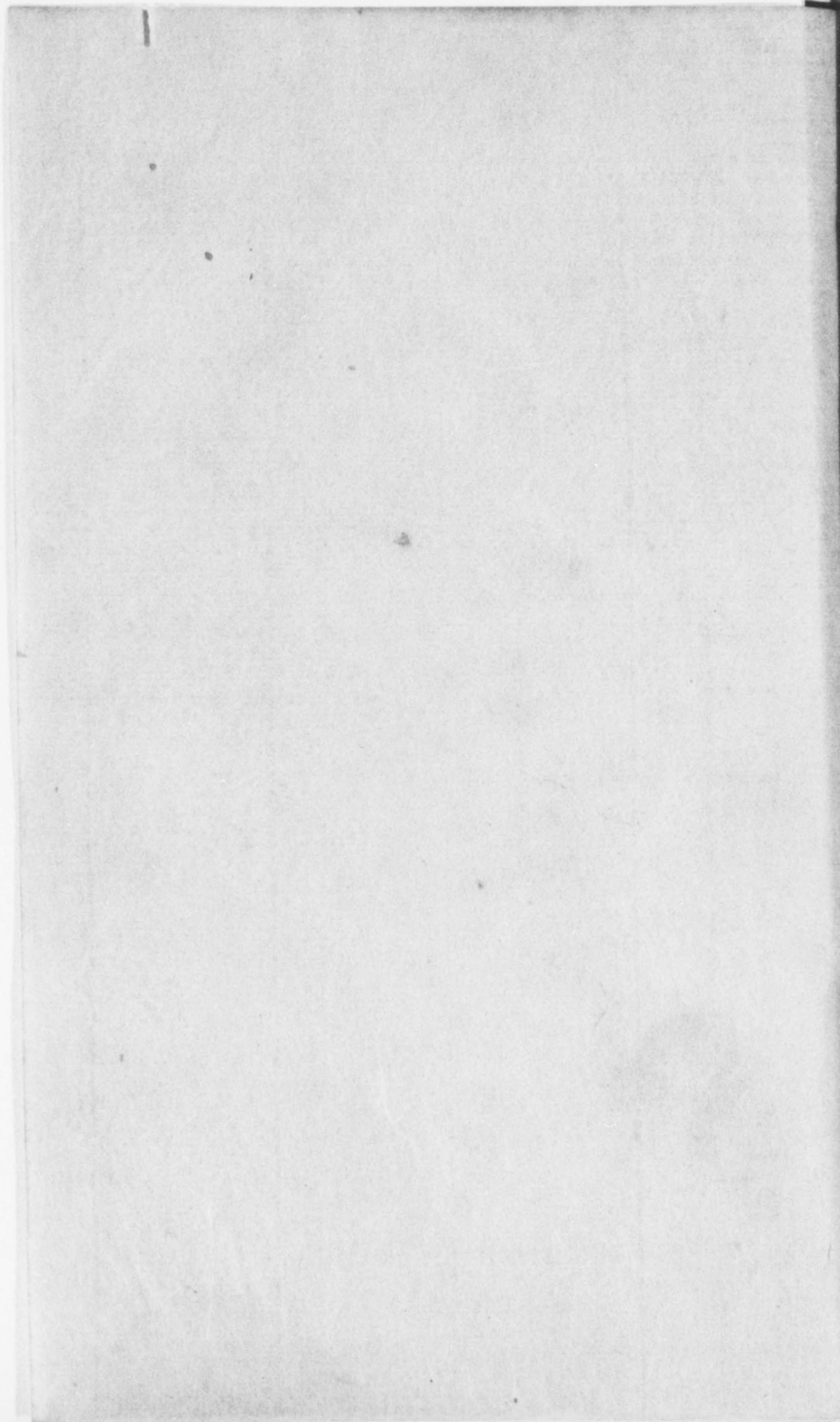
第四百四十五條 未必条件ニ関スル債主権又ハ
假リニ先許セラレタル債主権ノ為メニ貯存セ
シ金額ガ後、至リ其条件ノ成就セサリシニ因
リ若クハ其債主権ヲ竟ニ除却セラレタルニ因

リ別ニ處分スル一ヲ得ルニ至リタル時或ハ解
除ノ未必条件ノ成就シタル時ハ右ノ金高ハ前
条ニ規定セラルカ如ク既、順序中ニ加ヘラレタ
ル権利者ニシテ未タ自ラ充分ノ辨濟ヲ受ケサ
ル者、同ニ之ヲ分派ス可シ余分ノ金高タル時
ハ其差押ヲ受ケタル義務者又ハ嘗テ制止差押
即チ故障申立ヲ為サ、リシ権利者ニ之ヲ返還
ス可シ

本條ノ法文ハ別ニ註明スルニ及ハサルナリ

千八百八十三年六月

ボワソナード稿



書
法
卷

